
ロンドン・ノクターン

橘川芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロンドン・ノクターン

【Nコード】

N0775F

【作者名】

橘川芙蓉

【あらすじ】

強引で俺様なダンピール、ロベルトに見初められたダリアは、いつも貧血気味。彼に引き込まれるようにロンドンの闇へと足を踏み入れていく。貴族社会と、吸血鬼世界の狭間でダリアが見たものは？…：吸血鬼と闇の世界を歩く現代ファンタジー。

第一話：満月の夜の訪問者

それは、人の目に認識されない速度で疾走した。普通の人であれば、風がうなり声を上げて通り抜けただけだと思うだろう。

だが、違う。

人ではあらぬモノが、満月の月の光を浴びながら闇の中を駆け抜けたのだ。

吐く息さえ凍てつきそうなほどの冬空の下、ソレはある屋敷の屋根の上にとどまると、にやりと冷酷そうな笑顔を浮かべた。

人の姿をとってはいるが、人ではないモノ。口の端から人にしては発達した犬歯が覗く。

……人は、それを「吸血鬼」と呼ぶ。

「……誰……？誰か、いるの？」

部屋の明かりはすでに消して、寝る支度をしていた少女は物音に気がついてあたりを見回した。息を潜めた小さな問いかけに答えるものは居ない。気のせいかと思つてベッドに横たわる。彼女の住んでいる屋敷は、先祖代々伝わる由緒ある住まいだが、今は自分と数人の使用人しか居ない。両親は、今日は、予定があるといつて今夜は屋敷には帰らない。

屋敷が広すぎるから、不気味なのだ……。

そう、彼女は自分に言い聞かせた。彼女は生まれたときから、この屋敷に住んでいたわけではない。最近になってこの「杉の木屋敷」と二つ名がついている家に引っ越してきた。それまでは、片田舎のマンナーハウスに住んでいた。滅多に両親はマンナーハウスにやってくることはなかったけれど、乳母とわずかな使用人と家族のようにのんびりと生活していた。何も無くて、退屈なときもあつたけれど、自分なりに楽しかったのだと思う。

年頃になったので、ロンドンの屋敷に住みなさいと、両親からの手紙で呼び出され、最初こそ浮かれていたものの、都会の喧騒は自分には合わないのではないかと思いはじめていた。

眠れなくて、少女はベッドの上に起き上がりマホガニー製のナイトテーブルに視線を向けた。

そこには、両親からもらった手紙が無造作に置かれていた。

「親愛なるダリア・メイヤーズ」という書き出しから始まるタイプイングされた手紙を少女は手に取った。最後のサインだけが、父親が書いたのだと判るのだ。後は、父親の秘書が代わりにタイプイングをしたのだろう。

少女は……ダリアは、深くため息をついた。

「元気がないようだな、お嬢さん」

自分以外は居ないはずの部屋に、第三者の、しかも知らない男の声が聞こえてダリアは文字通り飛び上がりんばかりに驚いた。シートで自分の体をかばうように覆いながらあたりを見回す。

「こちらだよ」

すぐ近くで声が聞こえて、ダリアは声にならないほど驚いた。人が動いた気配がまったくしなかったからだ。部屋の電気を付けたくても、部屋のスイッチは入り口の横の壁にあつて、得体の知れない人の横を通らないとそこには行けない。

「誰……?」

ようやく声がでた。

「お嬢さんは、私の顔をお忘れか？」

芝居がかった台詞が鼻につく言い方だが、そういうことを言う人間をダリアは一人も知らなかった。顔を、と言われても彼はちやうど部屋の暗がりには居て顔すら見えない。

「やれやれ、つれないお嬢さんだ」

もっと近くで声が聞こえて、ダリアは後ずさりした。背中に冷たい壁が当たり追い詰められたことを悟る。

ここまでの接近を許して、ようやく誰だかわかった。

「あ……！」

声を上げようとしたダリアの口元をすばやく片手でふさぎ、開いている片手で男は自分のほうへ引き寄せてからベッドにダリアを押し倒した。その手馴れた手つきにダリアは目を白黒させた。

「声を上げてもらっては困るんだ。私は正式に招かれたわけではないからね」

ダリアの上のしかかるのは、花でさえ恥らうほどの完璧な容貌を持った男だった。仕立てのいいスーツを着てダリアに吐息がかかりそうなほど顔を近づけてささやいている。窓から入り込む月明かりに豪華な金髪が鈍く反射している。人にしては青白すぎる肌もぼんやりと月のように光っていた。

「正式に招いていないのに部屋に入ってくるのはルール違反よ！」
ダリアは首を振って、口元を押さえ込まれていた手から自由になった。押し殺した声で目の前の男に非難めいたことを言っても男は飄々として、顔色一つ変えない。ダリアの言葉はそよ風のごとく心地よく吹き抜けるだけのようだ。

「君が悪い」

男はそういって、口の端から人にしては発達しすぎた犬歯を覗かせた。

「君の血が美味しいのがいけないんだ……もう、二日もありつけていない。いくら人の血をほとんど摂取しなくてもいいダンピールだからといって、これはあまりの仕打ちじゃないか？」

「ようやく体調が良くなったの！また、悪くなるでしょ」

ダリアは初めて、この男の吸血行為を受け入れたときのことを思い出した。たくさん取られて、ダリアは翌日起きれなかったのだ。

「今度は、少しだけだよ」

甘く笑う男の声に、嫌だと思いつつも受け入れてしまう自分が居ることをダリアは知っていた。二度目のため息をついて、ダリアは体の力を抜いた。

血を吸おうと首筋に顔を近づけてくる男の顔の前に、ダリアは両手

を置いて妨害する。

「なんだ……？」

不機嫌な冷たい声を男は発したが、そんなことを気にもせずダリアは言った。

「名前は？」

「は？」

「私の血を吸おうとしている、男の名前を知りたいの」

男は、軽やかに笑ってダリアのあごに手をかけて自分のほうへと向かせると誰でも魅了してしまう笑顔を向けた。

「私は、ロベルト・マクシミリアンだ」

第二話：貴方とダンスを

確かにロベルトは、初日に比べたら至極少量しかダリアの血を吸わなかった。それでも、頭がぐらくらすするような感じと、全身を駆け抜ける快楽をダリアは味あわさせられた。

「なんで、そんなに睨むのかな？」

ダリアにのしかかったまま、ロベルトは余裕の笑みを浮かべて問いかけた。自分の腕の中に居るのは、人間、だけれど半分吸血鬼の血を引いた彼にとって見れば、腕に抱かれたか弱いウサギといつてもいいくらい「力」の差がある。顔を赤くして、怯えと期待の入り混じった視線で睨みつけられるのは、高みにいるロベルトにしてみれば、優越を感じるには十分だった。

ここで、ダリアに何か言われても「飼い猫がたわむれに引っかいた」ぐらいにしかなれない。

「このバカ」

投げつけてこようとする枕を片手で受け止めて、にやにやとロベルトは笑った。ダリアは、それが面白くないのか、ぶつぶつと口の中で文句を呟いていたが、やがてふいつと顔を横に向けた。

(結構気持ち良かった、なんて口にできない)

ダリアは、何も言うまいと口をへの字に曲げている。ロベルトは、にやにや笑ったまま飼い猫の機嫌を取るかのように、ダリアのあごを指先でなでる。肌を触るか触らないかの微妙な力加減で、撫で回している。とダリアの口元がぴくぴくと動いた。くすぐったいのをこらえているのだ。ロベルトは更に笑みを深くして、なで続けた。やがて、こらえきれなくなったのかダリアは噴出すように笑って、ロベルトへと顔を向けた。それでも、もう一度ロベルトを睨むと、少しだけ不機嫌そうな表情をしたロベルトと視線が合った。瞬きを三回するぐらいにらみ合ったままだったが、お互いに気が抜けたように同時に笑った。

「いい加減にどいて」

ダリアは、ぼんぼんとロベルトの肩をたたいた。あっさりと、彼はダリアの上から降りて、ベッドに腰掛ける。

「すっごく眠いの」

「血を吸われれば、少しは負担がかかるから」

少し？と言いたそうに、ダリアはロベルトを再び睨みつける。ダリアの視線をあつさりを受け流して、ロベルトは幼い子供にそうするように、おなかの辺りをぼんぼんと軽くたたいた。

「寝るといい。私が番をしよう」

「そっちのほうで、不安なんだけど」

「私は満腹のときでも無闇に食べる人間とは違うぞ」

一定のリズムを保ったまま、おなかの辺りを叩かれてダリアは、どんどん沈み込むように意識が飲まれていくのを感じた。

警戒心もあつたものじゃない……

そう思ったけれど、接着剤でくっつけてしまったかのような瞼をこじ開けることはできなかった。

社交界デビューというのは思った以上に、滑稽なことだと人事のようにダリアは思った。一度は途絶えた風習なのだ。なのに新しい世紀に入った今になって、どうして復活させようと思ったのか不思議でならない。「伝統を守るため」とかなんとかもつともらしい事を、王室広報が言っていた気がしたが、ダリアはそんな細かいことまで覚えていなかった。

さすがにコルセットをつけることはないが、ウエストのくびれを強調するイブニングドレスを着用して、首元には真珠の豪華なネックレスをつけたダリアは少々ウンザリし始めていた。

今日は、公爵家の舞踏会に行くのだ。そのお屋敷には16時に到着していればいい。現在の時刻は、まだ、朝10時だ。たくさんの使用人に囲まれて、あつちを向いたりこつちを向いたり、立ったり座

ったり、全部舞踏会の準備のためだ。

鏡に映る自分を見るたびに、鏡を叩き割ってやりたい衝動に駆られるほど、恥ずかしいとダリアは思っていた。

幸いなことに、昨日ロベルトが血を吸っていたが、その痕はまったく首元に残っていなかった。歯形でも残っていたらどうやって言い訳をしようかとダリアは考えていたのだが、徒労に終わった。

彼女ははやく自由にならないかなと思いつながら、部屋の窓から見える薔薇が満開の小さな門を見た。

「ザ・シーズン」と言われていたこの風習も今は、形を変えている。貴族同士の結婚相手を見つげるための場所だったが、現在はその傾向は薄れている。とはいえ、未婚の女性が出席する場合にはエスコート役が必要で、その役割は主に父親が担っている。

ダリアも例外なく父親の腕に、自分の右腕を絡ませて公爵家の舞踏会でエスコートされている。

広間でひっきりなしに父親に誰かが挨拶に来る。そのたびにダリアは紹介されるので、作り笑いで、顔が引きつっていた。もう帰りた、と思っていると広間の一角で黄色い歓声が上がった。

昔ほどではないにしろ、そういう声を上げるのは貴族の娘として恥ずかしいことだ、と教えられているので、よっぽど良い何かがあったに違いない。

(それほどいい男が来たってことだろうけど)

誰なんだろうと、ダリアは父親が話し込んでいるのをいいことに期待した表情で、人垣を注視する。その黄色い歓声の中心の男が良く見たことのある人物だと判った瞬間、ダリアはひきつった微笑みが顔にへばりついた。

無駄に煌いている男は、周囲の呼び止める声を柔らかに受け流して、一直線にダリアに向かって歩いてきている。とっさにダリアは手にしていた扇子で顔を隠して父親の服の袖を引っ張り注意をこちらに向けさせる。

行儀が悪い、と叱ろうとしたダリアの父親は自分の娘が顔を隠して

右手ひとさし指で指す方向に、あらぬほどの美しい男が優雅に自分に挨拶をするのをみて、呆然と立ち尽くした。

「メイヤーズ卿、ミス・メイヤーズをお借りいたします」

自分を指差す手を青年は握り締めて、わずかに抵抗するダリアを中央のダンスフロアへと導いた。

「どうしてここにいるの？」

「招待状をもらったからだよ、お嬢さん」

飄々とした表情で、しれっと答えるダンピールに、今履いているヒールで完璧な造作の顔面を踏みつけてやりたいと、少々危険なことをダリアは思った。

「なんで、貴方とダンスをしなきゃいけないのよ」

「私が踊りたいから、するんだ。まさか君は、壁の花になりに来たわけではないのだろう？」

壁の花になるのはごめんだっただから、誰かと踊ろうとは思っていたがその相手にロベルトを考えていたわけではない、とダリアは言うてやろうと顔を隠していた扇子をはずして、ロベルトを見上げると言葉が出なかった。

いつもの皮肉たつぷりの微笑ではなくて、優しくダリアを見下ろしてダンスがしやすいようにダリアをエスコートしている。

（今日ばかりは、許すか）

美しいワルツの調べに乗って、ダリアもロベルトに微笑み返した。

一曲終わっても、ロベルトはダリアを離そうとはしなかった。そのまま壁際まで移動して、ロベルトはダリアにワイングラスを差し出した。

「こんなところで、私の相手をしていいの？」

「私はほかの女性に気を移すほど、薄情な男ではないよ。今日は君のために来たんだ」

「よく回る口ね」

「思ったことをそのまま口に出しているだけだ。君に対して下心があるから、褒めているのだ」

正直すぎる、とダリアは思ったが口には出さなかった。

「血はあげないわよ」

「血ではない。私の仕事を少々……手伝ってもらおうかと思ってね」
ダンピールである彼が、なんの仕事をしているのかと好奇心がむくむくと沸いて、ダリアは深く考えずにうなづいた。

その選択が、ダリアの人生を大きく変えるものだとはこのとき、ダリアは思いもしなかったのだった。

第三話：内緒話はバルコニーで

ロベルトは、ダリアについてくる様に言うと、バルコニーへと悠然と歩いていく。ダリアが後についていくことを信じて疑っていないようだ。いつそのこと、無視してやろうかとダリアは思ったが、機嫌を損ねられると次の吸血行為のときに、ひどい目にあうのは自分だった。

バルコニーへ出ると、夜風に乗って夏の薔薇の香りがした。もう、六月とはいえ夜風は肌にかたい。肩を露出させているダリアは、わずかに身震いをした。手すりに寄りかかって、物憂げな表情をしてロベルトはこちらを見ている。一枚の完成された絵のような男のポーズが、人ではないのだ、とダリアに強く意識させる。

「あそこは、人が多くていけない」
ロベルトが物憂げに見ているのはダリアではなくて、ダリアの背後に見える華やかな広間の様子だ。

「みんな自分のおしゃべりに夢中に見えるけれど」
ロベルトの言葉に、夢から覚めたようにダリアは手すりのほうへ足を勧める。振り返って誰もが笑顔で話しているある種、不気味な光景を見てダリアは言った。

「ああいうところでは、話したことがすぐさま全員に伝わる。いい男である私が、社交界デビューしたばかりの、メイヤーズ卿の令嬢に真っ先に声をかけたことで、話題は持ちきりだ」

自分のことを「いい男だ」と臆面もなく評価するところに、ダリアは尊敬の念すら抱く。事実、容姿だけはこの広間にいる誰よりも整っていて、下世話な言い方をすれば特上といってもいいぐらいだ。そう、容貌だけは。

「君は、言ってしまうえば、美人ではない。だから余計に人々の関心に上がる」

本当に、正直すぎるとダリアは思った。やっぱり、今履いているピ

ンヒールで、完璧だと自分ですら称える顔を踏みつけてやれば、少しは思い知るのではないだろうか。

「美人ではないことぐらい、自覚しているから指摘してくれなくても結構よ」

「そう、拗ねるな……。今は美人でなくても、将来変わるかもしれないのだから」

ロベルトはくすくすと笑うが、その笑い方が悪意に満ちていてダリアはロベルトを睨み付けて、問答無用でロベルトの足の甲をヒールで踏みつけた。

よけることもできただろうに、ロベルトはおとなしく踏まれて「痛いじゃないか」とわざとらしく言った。

「あそこは、私以上の悪意の塊だ。ザ・シーズンは一部の人間にとつては、めくらましとして必要で、その他大勢にとつては、隣の芝生が気になつて仕方がないだけだ」

爵位を持ったものが一同に集まるのは、最近ではなかなかないことだ。あの家はどれだけ成功したのだろう、この家はどれだけ落ちぶれたのだろう、と野次馬根性を覗かせているからおしゃべりに花が咲くのだ。

「重要なのは、一部の人間のめくらましのほうだ。公爵家の舞踏会には王室も参加する。普段集まるとマスコミの注目を集めてしまう人たちも、ここならそう注目されない。普段できないような話をするといいわけだ」

「普段できない話って?」

「さて?……下っ端の私には、知らない話だよ」

ロベルトが下っ端である、というのは嘘だろうと、ダリアは見抜いた。あの性格で、誰かにあごで使われているというのは、俄かには信じがたい。誰かをあごで使っているというのなら、すぐに想像ができた。

「私の今の仕事は、噂を集めることだ」

「タブロイドにでも売ろうって言うの?」

「そんなことはしないさ」

ロベルトは、目を細めて楽しそうに笑った。

「噂の中から真相を探すのだよ。吸血鬼、というものは『現実』には存在していないと世間一般にまだ、言われているだろう。まだ、表舞台に出られては少々困った事態になるのでね、出ようとしている者たちを探しているのだ」

「表舞台って……世間に認めさせようとしてるの？」

ダリアの問いかけに、ロベルトはあいまいに笑った。

「君は、私の気づかないささやかな噂話を集めてくれればいいんだ。できる限り、吸血鬼に関するちよつと厄介そうな噂話がいい」

吸血鬼の厄介そうな噂話とはいったいなんだろう、とダリアは思ったが口にはしなかった。代わりに出てきたのは、自分でも可愛くないと思う言葉だった。

「なんで私がやるの？」

「……普通じゃなくて、特別になりたいといったのは誰だったかな？」

ロベルトの意地悪な笑みを浮かべた言葉に、ダリアは反論できずに居た。ロベルトと血の契約を結んだときに、「平凡でなく、普通ではない生活がしたい」とダリアは言ったのだ。律儀にロベルトは守ろうとしているのだ。

「ロベルトなら、誰からでもどんなことでも聞きだせると思うけど」

「残念ながら、私を警戒するお嬢さんもいるのだよ。同性である君なら、心を開くかもしれないね」

残念、と言葉では言っているもののロベルトは大して残念そうでもない。

「わかったわ。『吸血鬼に関するちよつと厄介そうなコト』と聞き出すのね。そんなこと、話題に出す人のほうが珍しいと思うけど」
本格的に夜風が冷たくなってきた、ダリアは身震いをした。広間に戻ろうとしたところで、ロベルトがダリアを呼び止めた。

「君は、苦勞しなくても色々な人に声をかけられるだろうよ」

ロベルトは、ダリアが憎たらしいと良く思う、人を食ったような微笑を浮かべて言葉を続けた。

「この私と二人でバルコニーなんかにいたのだからね。そりゃ、もう質問攻めさ」

もう一回ピンヒールで足を踏んでやるうか、とダリアは思った。

第四話：ロベルトのお仕事

ダリアがバルコニーから広間に戻ると、好奇心旺盛な同世代の女子の集団があつという間にダリアを取り囲んだ。みんな綺麗に着飾つて、どつからどうみても「素敵な貴族のご令嬢」だった。

みんな口々に自己紹介をし、ダリアと話したがる。もちろん、話題は「素敵なあの人と二人きりでいたこと」についてだ。恋に恋する年頃とはよく言ったもので、この手の話題には食いつきが非常に良かった。ダリアがただの「知り合いの青年」と答えても、「嘘ばかり」と一致団結してからかう。

ダリアが意外だと思つたのは、よくある物語であれば、高飛車な令嬢が現れて、「貴女には不似合いよ」と批評をしてくれるものだが、そんな人は一人もいなかった。素敵な人に見初められて羨ましい、という感情はあつても自分が、その相手に成り代わろうとは思わならしい。理由を聞いてみたら、みんなためらいがちに言った。

「だって、あの人……怖い」

ロベルトの特異性を表している言葉だなとダリアは思った。ロベルトは超絶的な美形だ。美しい顔立ちで左右対称なのだ。畏怖の念は抱いても、恋愛感情にはつながらないのだろう。それは彼が「吸血と人間の子供」であることを無意識のうちに気がついているのかもしれない。本能的に「安全ではない人」だと悟るのだろう。

一般的に畏怖の念を抱く青年を、いともたやすく懐に許容しているダリアは、やはり普通ではないのだけれど、本人は「つまらないぐらいの凡人で嫌気がする」と思っているのだ。

「ね、最近……ミスター・マクシミリアンみたいにちょっと怖い雰囲気の人噂って聞かない？」

普段は、名前で呼んでいるのでかしまった言い方をすると旨く口が回らないものだ、と、ダリアは思った。

「ミス・メイヤーズは、ほかの男性にも興味があるの？」

「好奇心よ。ほら、ああいう怖い人には神秘的で怖い話がつき物でしょう?」

ロベルトに神秘的で怖い話がつきものだとは、小指の先ほどもダリアは思っていないが聞き出すためには何でもいえそうだった。

「そうね……ちょっと違うかもしれないけれど、最近物騒な事件が多いでしょう。昔の切り裂きジャックみたいなの……」

「そうそう、目撃されている犯人がとても要望の美しい青年だといわれているわよね」

彼女たちが口々に話す事件のことを、ダリアも新聞に載っている程度に知っていた。ホワイトチャペルで女たちが次々に殺されているという事件だ。マスコミはそれを「切り裂きジャック事件再び」として報道している。犯人の目撃情報が多いのにもかかわらず、逮捕することができないという点で、マスコミはスコットランド・ヤードの捜査能力を批判していた。

「美しい青年が、美女の血を求めて夜な夜なさ迷っている……ちょっとロマンチックよね」

どこか?とダリアは詰め寄りたほどだったが、お上品なふりをしながら笑ってごまかす。美女の血を求めて夜な夜なさ迷う、というあたりは吸血鬼というイメージにぴったりだが、そこまで一致するものだろうか。

「ずいぶん詳しいのね」

ダリアが感心すると、少女は照れたように笑った。

「私も、そういう話が好きなの」

彼女の名前はアーネット・フェリオと言った。ブルネットの髪に内気そうな顔立ちで、学校の優秀で模範的な生徒というイメージにぴったりだった。

「ね、私のこと名前で呼んで。私も、貴女のことアーネットって呼ぶことにするわ」

ダリアはごく自然に、アーネットと仲良くなるうとした。ダリアは、アーネットの瞳が暗い奥底にわずかに光るのを見て取った。よくみ

れば、アーネットのドレスのモチーフは逆さ十字でちょっと普通じゃない人だと、ダリアは思った。

ティーンにありがちな、ゴシック好きであれば越したことにならないのだが。

「ダリアは、どのような洋服が好き？私は、ヴィクトリア朝のレースをふんだんに使った服装が好きなの。クロスや王冠のモチーフも好きだし」

「私も、そういうの好き……か……な？」

本当は、よく知らない。歴史の授業は嫌いだったから、ヴィクトリア朝といわれても、産業革命が起こったという教科書的なことしか思い出せない。

ダリアは、嘘のメッキがはがれない事を、祈りながらアーネットに話をあわせた。

パーティーの終わりに、ダリアはロベルトと二人でまたバルコニーにいた。どういうわけか、ダリアの父親は、ロベルトと二人きりであることをとめようとはしない。

「いろんな人と知り合いになったわ。最も、吸血鬼の話題が出てきたのはアーネットと話したときだけよ」

「彼女に目をつけるなんて、いい勘をしているじゃないか。ミス・フェリオはガードが固くてね。私の美貌に頬を染めることはあっても、決して余所行きの顔を崩しはしなかったんだ」

「貴方、結構怖がられてたよ」

「私の魅力を子供は理解できないんだ」
どこまでいってもポジティブな思考に、ダリアは呆れてただ、うなずいていた。この性格で吸血鬼と人間の子供というファンタジー世界の住人のような出自なのだ。

「それで……」

ロベルトがダリアに話の続きを促そうとして、言葉をつむいだたと

ん何かに気がついたのか、ロベルトはダンスフロアのほうへと視線を向けた。ダリアがつられてそちらに視線を向けると、瞬きの間にロベルトはダンスフロアの中央へと移動し、一人の青年と対峙していた。

青年はケーキを取り分けるためのパレットナイフを振りかざして、ロベルトがそれを素手で受け止めていた。ロベルトがかばうように立っているのは、蒼白な顔色をした赤毛の美女だった。

「こんなところで感心しないな」

ロベルトは大して力をこめているようにも見えないが、青年はパレットナイフを振りかざしたまま、手を下ろすことができないようだ。ダリアのいる位置から青年の顔を見ることはできないが、尋常ならざる雰囲気というのは良く伝わってきた。

すぐに、周囲から悲鳴があがるがこの二人の間に割って入ろうという無謀な人間はいないようであった。むしろ、保護したほうがいい女性ですら野次馬に囲まれている。

ダリアもできることなら、野次馬にまぎれてしまいたかったが、このままだとロベルトの異常な反射神経が人々の記憶に残るだろう。そして、ダリアは手時かなテーブルの上に載っていた、ワイングラスを手に取りできる限り優雅なしぐさで近づくと、パレットナイフを振り上げている青年に向けてワイングラスの中身をおもいっきりぶちまけた。

「いつまでも、そのようなことをされると迷惑だわ」

啖呵をきるダリアに、あわてて舞踏会の主催者である侯爵が駆けつけて、スタッフと一緒に青年をどこかへとつれていった。たちまち野次馬達から拍手があがり、ロベルトとダリアは芝居がかったしぐさで一礼した。

第五話：ようこそ秘密倶楽部へ

ロベルトにつれられて、ダリアは広間をあとにする。騒ぎに乗じて逃げ出してきたので、誰にも咎められることはない。クロークに預けておいた荷物を取ると、ロベルトは自然な動作でダリアをエスコートする。

「私、お父様と来たんだけど」

珍しく穏やかに笑ってロベルトは片手をダリアに差し出している。誰がみても完璧な紳士だ。

「大丈夫、送っていくよ」

ロベルトの言葉にダリアは渋々うなずいて、ロベルトにエスコートされる。外にはちゃんと人間の運転手がいる車が待機していた。

「貴方……人間らしい生活もしているのね」

「今の一言で、お嬢さんが私のことをどのような評価をしていたのか、一端が伺えるな」

後部座席に座って、ロベルトは意地悪そうに笑った。ダリアはからかわれた事に、不服そうに唇を尖らせた。隣り合って座り、しばらく黙ったまま静かに車が走る。

「こつち、私の家の方向じゃないわ」

走る車の中から、夜のロンドンの町並みを見てダリアが呟いた。隣に座るロベルトは意味深に笑うだけで、何も言わない。

「……ロベルト、お父様と知り合いなのね？」

ダリアは突然なにかもがわかった、と言わんばかりの口調で言った。

「なぜ、そう思うのかね？理由を聞いても良いかな？」

「幾らなんでも、娘が自分が知りもしない男と一緒にいるだなんて知ったら、携帯電話に電話をしてきて、うるさいぐらいにどんな男か問い詰めるはずだもの」

ダリアはハンドバックから、携帯電話を取り出して着信履歴がまったくくないのを確認する。

「広間で、貴方が私にダンスを誘いに来たときも、お父様は止めようとはしなかったわ。どちらかというと、意外で呆然としたって感じ……だから、知り合いだと思ったの」

一点を見つめながら、いままであった事を理論的にダリアは説明する。記憶を再生しているかのようなしぐさに、ロベルトは目を細めて見つめた。

「正解だよ。同じ倶楽部のメンバーなんだ」

「意外」

ダリアは呟いた。

「お父様が、倶楽部なんてものに所属するなんて思わなかったわ」

「貴族のたしなみだよ。お嬢さん」

「……この車の目的地もその倶楽部の場所なのね？」

ロベルトは、口笛を吹いて感嘆した。

「人間にしては、頭の回転が速いようだね。そうだ、君のお父上やそのほかのメンバーたちが集まることになっているんだ」

「そんなところに、会員でもない私が言ってもいいの？」

「かまわないさ……メイヤーズ卿だって承知だ。私が、君を連れて行くことを」

ロベルトの返事にダリアは呆れた顔をした。今日、自分の父親とロベルトが話しているところをみていない。つまり、こうして舞踏会の後ロベルトがダリアをエスコートして倶楽部につれていくことを以前から打ち合わせてあったことになる。

もしかして、ロベルトが自分を吸血行為の相手だとしたのも、そうした相談した結果なのではないかと、思ってしまった。

「貴方の手の中で踊ってるかと思うと、気分が悪いわ」

「踊らされると気づく分、お嬢さんは賢いほうさ」

口の端をあげてクツクツとロベルトが笑った。本当に楽しそうに笑っていて、ダリアは眉を寄せて不機嫌そうにロベルトを睨み付けた。それでも、ロベルトは楽しそうだ。

ダリアが一言文句でも言ってやろうとしたとき、車がすべらかに止

まる。

「ついたようだね、お嬢さん」

出鼻をくじかれて、飲み込むのに困ったような表情をしているダリアの額をロベルトがおかしそうに人差し指でつついた。さらに膨れるダリアに、ロベルトは右手を差し出してエスコートをする。

ついたのは、ロンドンの中心部に近いストリートで、ダリアは何度かその建物の前を通ったことがある。古い建築が珍しくないロンドンで、よく手の行き届いた古い建物という印象のあったところだ。

ロベルトが重そうに見える扉を難なく押し開けて、建物の中に入る。受付には、品のいい老婦人が座っていてロベルトとダリアをにこやかに迎える。

「みんな来ているのかな？」

「お揃いのですよ」

ロベルトの質問に答えながら、老婦人はダリアへ微笑む。温かい笑顔にダリアは恥ずかしくなって、うつむき加減に微笑み返す。

「こちらが、メイヤーズ卿のご令嬢のミス・ダリアですよ」

ロベルトが老婦人にダリアを紹介する。

「こちらは、受付を担当してくれているマダム・ホーソンだ」

ダリアは、恥ずかしそうに右手を差し出してマダム・ホーソンと握手をする。まだ社交的なやりとりに慣れていないのだ。

ダリアは、ロベルトの案内で廊下を歩いている。建てられたのはヴィクトリア時代で、元はアパートメントだったらしい。今は、倶楽部で利用しているのだそうだ。

「ね………そういえば、なんの倶楽部なの？」

ロベルトは、秘密といわんばかりに片目をつぶって、左の人差し指を口の前に一本立てる。大きな扉の前に立ち止まり、ロベルトはノックをしたあとに扉を開けた。

部屋の中は、居心地のよさそうなサロンといった雰囲気ですわり心地のよさそうなソファの中心に腰掛けている、体格の大きい男が威厳たつぷりに言った。

「ようこそ、ディオゲネス・クラブへ」

第六話：デイオゲネスクラブ

デイオゲネスクラブといえば、イギリス人なら誰でも知っている探偵物の小説に出てくる倶楽部の名前だ。探偵小説を好む者達が集まった倶楽部もあるだろうが、ロベルトが所属しているとは思えなくて、ダリアは考え直す。

「私は、デイオゲネスクラブといえば、あの小説の……」

「まさにそれだ」

ソファにゆつたりと座る男がダリアの言葉にかぶせるように答えた。男の言葉に、オックスフォードなまりを聴きつけた、ダリアは鼻で笑うように言った。

「まさか、貴方がマイクロフト・ホームズだと言わないわよね？」

「そうだ」

いかにも、と鷹揚に頷いた男にダリアは二の句がつけなくなり、隣にいるロベルトに視線を向けた。ロベルトは、にやにやと意地悪な笑みをダリアに見せるだけだ。

「マイクロフト・ホームズは小説の登場人物よ？しかも、ビクトリア朝時代の。生きてるわけが……」

「小説に出ているのは、私の曾祖父だ」

「……同じ名前なのね……じゃなくて、小説では彼は独身だと」

「ドクター・ワトソンは、プライベートを書かなかったのだよ。曾祖父は政府と自宅の往復の中で、文字通りの運命の出会いというのをしたのだ。その結果、父が生まれ、私が生まれたわけだ」

ダリアは、もう一度ロベルトに視線を向けると、今度は意地悪な笑いではなくてちょっと困ったように笑っていた。

「わかったわ。ミスター・ホームズ。私の父も、ここの一員なのよね？」

「頭の回転が速くて助かる。ミスター・メイヤーズは私の盟友だよ」「気味の悪いことを言わないでくれたまえ」

そこに良く通る声が、二人の話を中断させる。

ダリアは声の聞こえるほうに振り返って、椅子から立ち上がった。

「お父様」

「ミスター・メイヤーズ、君は別室で次のケースの打ち合わせをしていたのではなかったのかね？」

「おちおち話を聞いていられるか。テストの結果はどうなんだ？」

「申し分ない、合格だ」

面白くもなさそうに、マイクロフトが言うと、ダリアは何のことだと聞き返した。

「ここ数日間、君の行動、話し方、いろいろなものを観察させてもらったのだ。ミス・メイヤーズ、君は、非常に優秀だ。頭の回転も速く、臨機応変で、寛容だ」

「むかつく」

マイクロフトがダリアのことを褒めているにもかかわらず、ダリアは悪態をついた。

「勝手に、テストとやらをして、ディオゲネスクラブの会員資格に合格した、といたいのでしょ？」

「そうだ」

「それが、むかつくのよ。勝手にテストをしないでちょうだい！」

「ミス・メイヤーズ、この会員の資格があると言い出したのは、君の父親だ。そして、難しいテストに合格した。それは誇るべきことだ」

「だいたい、このディオゲネスクラブってなにをやっているのよ」いつも居丈高に、高いところから見下ろしているようなマイクロフトが珍しく、目を丸くしダリアを見た。まるで珍獣でも見るかのようだ。ほかの者達も多かれ少なかれ、そのような表情をして、ダリアをみている。

そんなことも知らずに、ここにいるのか、と無言の圧力をダリアは感じた。

「昔から決まっているだろう。ディオゲネスクラブはイギリス政府

のため、ひいては女王陛下の恩ため、表では解決できないあらゆるケースを解決するのだ」

「スパイなら、専門機関にやらせればいいじゃない」

「そんなことはしない」

即座に否定したマイクロフトは、視線をロベルトに移した。つられてダリアもロベルトへと視線を向ける。

「最近の流行は、吸血鬼ハンターなんだよ」

ロベルトは、爽やかすぎるほどの満面の笑みを浮かべてダリアに答えた。

第七話：曖昧になる境界線

マイクロフトがダリアに告げたのは、ファンタジー世界にしか存在しないと思われる職業だった。

自分の隣には人外の美形である吸血鬼と、目の前には推理小説の登場人物の曾孫がいるが、それでも、吸血鬼ハンターが職業として成り立っていることが、日常とは思えなかった。

自分は、後戻りのできない奇妙な世界へと足を踏み入れているのではないかと、ダリアは不思議な高揚感とともに不安を覚えた。

「ダンピールで吸血鬼ハンターなんて小説の読みすぎじゃないの？」
ダリアは憎まれ口をきいた。

「現実の小説のように寛容ではないよ」

同じように綺麗な世界ではあるが、とマイクロフトは自信たっぷりと言った。

「君の初仕事は吸血鬼ハンターのロベルトの手伝いだ。うまくいったら、給料もあげよう」

ビジネスの契約書があるからよく読むように、マイクロフトは言った。ダリアの父親は働くことについて何も言わなかった。貴族は働かない習慣があるのにもかかわらずだ。

もともと、ダリアをディオゲネス・クラブへと導いたのは彼であった。反対するわけがない、とダリアが気が付いたところで諦めがついたのか契約書に目を通した。

働かなくても食べて行ける。働くことは美德とされない身分で育ったが、ロンドンの闇の領域に足を踏み入れるのはたまらないほど蠱惑的だった。

「しばらくは、ロベルトの指示に従うといい。それと護身術などの基礎レッスンを受けておくように」

契約書にサインをしているダリアにマイクロフトは言った。

「そう言えば……」

ダリアは何故か、ロベルトと一緒に帰りの車内で呟いた。

「マイクロフトがいるぐらいだから、シャーロックもいるのかしら？」

ダリアの問いかけに、ロベルトはさも当然といたげに頷いた。

「マイクロフトやシャーロックはホームズ家の称号みたいなものだ。一族の中から優秀なものが名を継ぐ。シャーロックはマイクロフトの年の離れた従兄弟が襲名している」

「憧れのヒーローが実在するって素敵ね」

「なんだ、お嬢さんはシャーロックが好きなのか」

「子供の頃の憧れよ。魅力的な男性に思えたわ」

「お嬢さんは、風変わりな男が好みなのか？」

呆れ半分、好奇心半分と言った口調でロベルトは尋ねた。

風変わりとソフトな表現をしているが、一般的にはエキセントリックであると小説の描写からは伺える。

ダリアはその事を熟知していたので苦笑しながら答えた。

「スティックでしょ。浮気をしなさそうですもの」

ちらっとロベルトに視線を投げかけて、すぐに正面を向いた。もうすぐで、杉の木屋敷に到着する。

「私が浮気をしているとでもいいたいのかね？」

「そんなことは言っていないわ」

恋人同士でもないのに、この会話は不毛だった。ダリアはロベルトは浮気をしそうなタイプだと思っただけで、現在の交遊関係をどうこう指摘するつもりはない。

「真実、誓ってお嬢さん以外の女性には触れてないよ」

今は。という言葉でロベルトは口の中で呟いた。

「あの月に誓ってもいい」

ロベルトは車の窓から見える三日月を芝居がかったしぐさで指した。そのしぐさにダリアはため息をついて応じた。

「月なんて、いつも形を変える移り気なもの象徴じゃないの」
静かに車が停車し、ダリアは運転手が車の扉を開けるのを待った。

「ダリア」

珍しくロベルトが、立ち上がった少女の名前を呼んだ。

ダリアは車の外に出て、ロベルトに対抗するかのよう芝居地味な仕草で三日月を指した。

「あの月に誓って喜んだご婦人に慰めてもらいなさいよ」

ダリアは、ロベルトの伸ばした手を振り払い、エントランスに迎え出てきた家令の方へと歩いていった。

ロベルトは気を悪くした風でもなく、むしろ言葉遊びを楽しんでいるのか、クスクスと笑って運転手に屋敷に帰るように命じた。

三日月がその様子を優しく照らし出していた。

第八話：初仕事は意外な人と

普通の日常から抜け出したいと願っていたダリアは、吸血鬼ハンターの相棒になった。

願いは叶ったように見えたが、実際のところは雑用か訓練ばかりで実戦にでたことはなかった。

最も、現代で映画のように吸血鬼ハンターが狙う悪辣な吸血鬼がたぐさんいるとも思えなかった。

訓練は護身術から始まり、もつと実戦的な狩りをするための術を習った。貴族の娘というのは学校を卒業してしまえば、嫁に行くか、パーティーに出るか、花嫁修行の習い事をするしかないのです、この状況は願ってもないものだった。

「日に日に、引き締まっていくね」

今日のレッスンは終わると、デイオゲネスクラブでロベルトが待っていた。ロベルトの方でも仕事が忙しいのか、パーティーの夜以来、一週間ぶりに顔を合わせたのだった。

「最近、だいぶましな動きをするようになったんだから」

「それは、脱がしがいがありそうだ」

「貴方に脱がされた覚えなんてないわ」

見透かすように、赤みを帯びたロベルトの瞳が、ダリアの全身を上から下まで見つめる。

熱い視線に普通の少女であれば、機嫌を良くしながら頬を赤くしてうつ向きそうなものだ。

ロベルトもそれを期待したのだろう。しかし、ダリアの反応は酷く冷淡だった。「相変わらずつれないな、お嬢さんは」

「食料相手に何を期待しているのよ。私は鶏相手に話しかけても、顔を赤らめることを期待しないわ」

「変に理屈っぽいね。美しい私に口説かれたのだから、少しは嬉しがるといいのに」

「今度、考えておくわ」

考えるのではなくて、感じるのだ、とロベルトは年頃の女の子の一般的な反応をくどくどと、説明している。ダリアはそんな話は、右耳から左耳へと受け流している。

まったくダリアが聞く耳をもっていないのだ、とロベルトは気が付いて、珍しくため息をついた。

「今日はそんな話をするために、お嬢さんを待っていたわけではない」

ロベルトはソファから立ち上がって、コートを手にした。

「仕事だ」

ロベルトはわざわざタクシーを呼んで、ダリアと共に車に乗った。

ダリアは思案しているのか大人しく、ロベルトの隣に座っていた。

「向かっているのは、とあるクラブハウスだ」

ダリアは静かに、ロベルトの説明を聞いている。

「ある人物の護衛だ。私は目立つので離れたところにいる」

「護衛のノウハウを知らない私が役に立つとは思えないのだけど」

「牽制だ。お忍びでお越しだからな。ボディーガードに見えない方が都合がいい」

「どこのロイヤルファミリーがお出でになるのかしら」

「護衛対象が王族だとは言っていないが」

「貴方が敬語を使うなんてロイヤルファミリーぐらいなものだわ…」

…のつぽのマーティン？ スキャンダルクイーンのフローディア？」

ダリアはそれでも遠慮したのか、女王から血の遠い王族のティーンたちの名前をゴシップ誌に乗っているあだ名と共に口にした。

「もっと陛下に近いお方だ」

ロベルトの返答に、ダリアはもう少し範囲を広げ、ティーンから二十代前半の王族の名前をあげた。

しかし、ロベルトは首を振って否定するばかりだ。

「誰よ」

「アルゼル殿下だ」

告げられた名前は、ダリアが最初に候補から外した王族だ。年齢も二十代後半で、女王陛下の次男だ。

「皇太子じゃないの」

女王陛下の長男は幼くして病で亡くなっている。次男のアルゼルは両親や国民の期待を一心に背負わされているサラブレッドだ。

とてもじゃないが、クラブハウスに遊びに行くようには見えない。

「しっかり護衛してくれたまえ」

第九話：魔女のこと

クラブハウスに程近い、銀行の駐車場で皇太子一行と待ち合わせた。宮殿からは、皇太子と彼のセキュリティがきた。ここからは、セキュリティはついてこないのだ。よく、プロフェッショナルな彼らが許したものだ、とダリアは呆れた。

超人的な能力があるとはいえ、ロベルトは吸血鬼と人間のダブルだ。それだけ女王からの信頼もあるのだろうが、普段の言動を考えると、想像するのは難しかった。

ロベルトと二人で、三日月より少し膨らんだ月が照らす駐車場で目的の人物が来るのを待っていた。やがて、黒塗りの特殊車両がすべらかに、銀行の駐車場に入ってきた。

素早く車両から降りた、セキュリティが後部座席の扉をあけた。ゆっくりとした美しい動作で、車から降りたのは、美貌の青年だった。ダリアはメディアを通してしか見たことのない人物だ。

ロベルトが膝をついて礼をしようとするのを、彼は手だけで制した。その仕草は、命令しなれている、支配層の動作だった。

「ロベルト、また頼むよ。……そちらのご婦人は？」
ソフトな響きのする声をアルゼルは発した。
心地よい声が、ダリアの耳に残った。

「こちらは、私の相棒のダリア・メイヤーズ伯爵令嬢です」
「メイヤーズ伯の娘か。期待をしているよ。今日はよろしく」

皇太子に気さくに声をかけられて、第三者として二人のやりとりを見ていたダリアは慌てた。顔をわずかに蒸気させて、はい、だとか、光荣ですだとか堅苦しく、詰まりながら答えた。

ダリアの初々しさが良かったのか、アルゼルは優しく微笑した。

「私は今日は遠くから護衛しております。近くには、彼女がおります」

「新人にそんな重要な事を任せていいのか？」

凄く全うなことを、アルゼルの側に控えていたセキュリティがいった。ダリアは未だに訓練中のようなものだ。

「お嬢さんは数少ない本物の魔女だよ」

魔女というのは、映画やゲームの影響で杖を振り回して、炎を起こしたり、雨を降らせたりと派手なイメージが付きまとうが、ダリアは違う。

昔ながらの伝統的な魔女で、彼女の育てるハーブは通常ではあり得ない早さで育ち、そのハーブから作られた薬は驚くほどの威力を示した。

力は弱いものの、一秒先を見渡す「魔女の瞳」をもっている。

父親であるメイヤーズ伯爵は、どちらかといえば、マイクロフト寄りの頭脳戦に強いタイプで不思議な力は所有していない。

ダリアは魔女の家系だった母方の血を色濃く継いだのだった。

「証拠がみたい」

セキュリティの言うことは最もだったので、ダリアは懐から小さなサシエを取り出した。

何の変鉄もない麻布で作られた小さな巾着袋には乾燥したハーブが詰められている。

ダリアはどうぞ、とセキュリティにサシエを手渡した。

警戒もせずにセキュリティは受け取り、二秒後に地面に崩れ落ちた。「ラベンダーのサシエです」

他のセキュリティたちが、驚愕のあまり声がでない状態であるのに、ダリアは平然と説明した。

「渡すときに、ラベンダーの睡眠効果を高めるように念じて渡しました」

「本物の魔女とは素晴らしい力を持っているものだね」
感心したようにアルゼルがいった。

「魔女の瞳と併用すれば、危機回避ぐらいはできます」

今回は手渡しをしたが、場合によっては投げつけてもいいのだ。サ

シエが破れてハーブが空中に飛び散っても効果が少し薄れ、範囲が広がるだけだ。

セキュリティたちは、ダリアの力を認めざるを得なくて、三人でクラブハウスへと向かった。

クラブハウスの店名は「トワイライト」と言っただけのクラブハウスとは違った趣向の店だとロベルトはダリアに説明した。

「どんな趣向なの？」

「変わったドレスコードがある」

トワイライトのドレスコードは特殊で、吸血鬼の格好やゴシックかゴシックロリータの服装でなければ入れないのだという。

「店長が怪奇小説のマニアでね、映画と遜色のない吸血鬼の格好をしただけ無料だ」

「ロベルトはいつも無料なのね？」

ダリアの問いかけに、慥然とした表情でロベルトは答えた。

「吸血鬼にしては軽すぎると言われたよ」

ダリアはトワイライトの店長にあってみたくなくなった。半分とは言え、本物の吸血鬼の血を引いているロベルトの容姿を「軽すぎる」の一言で評価してしまうのは、肝が座っているとしかいいようがない。

「でも、そんな服を用意してないわよ」

「VIPは、専用の更衣室を貸してくれるのだ。殿下もいらっしやるのに、ゴシックなんて時代遅れの格好をして街を歩けない」

ロベルトの言い分も最もだとダリアは思った。

しかし、ロベルトの言葉の裏には、更衣室にダリア用の衣装が保管されているということだ。いつの間にと呆れるもの、こうなることを予測して用意しておいたのだから、さすがだ。

「変な衣装じゃないでしょうね」

「変かどうかは、君の主観が決めるのであって、私ではない。ドレスコードはクリアしていると言っておこう」

二人の心温まるやりとりを聞いていたアルゼルは楽しそうに笑った。ダリアとロベルトが視線を向けると、優しい笑みを浮かべて言った。

「君たちは仲が良いのだね」

その言葉に含みを感じたダリアは不快だと言わんばかりの表情で言った。

「殿下のおっしゃるような仲ではありません」

「はつきり言うなお嬢さんは」

「殿下は辞めてくれ。今日はお忍びだからね」

「なんとお呼びすれば？」

「アルゼルでいい」

ダリアが照れ臭そうに、頬をわずかに赤く染めて、「アルゼル」と呼ぶのをロベルトは面白くなさそうに見つめていた。

第十話：皇太子アルゼル

トワイライトはレンガ造りの古い洋館を改装したもので、アプローチにはタキシードにマント姿の男が二人、ドアマンとして立っていた。

ドレスコードのチェックをしているようだ。ロベルトはドアマンに何事かを告げるが、二人は規則だと言って道を塞いだままだ。

ロベルトはダリアとアルゼルに向き直って言った。

「二人とも申し訳ないけど、彼らが見せるカードの絵柄を言ってくれないかな」

カードなんかみせて、どうするのだろうとダリアは思ったが、ドアマンに見せられたカードに納得した。

特殊なインクで印字されたカードで、ダリアが見せられたのはタロットカードの一つで女教皇だった。

ダリアもアルゼルもカードの絵柄をあて、中に入る。

「ロベルト、ここ普通のお店じゃないのね」

ダリアの確信とも言える問いかけに、ロベルトは心外だと言わんばかりに答えた。

「普通の店に来るわけがないだろう」

「あのカード、ある能力を測るためにあるのね」

ダリアで言えば魔女の力、ロベルトであれば吸血鬼の血筋。

そういう、一般的ではない能力に反応するのだ。では、アルゼルは何の力に反応したのだろう。彼の能力をダリアは知らない。

まさか、王子に何の能力ですかと図々しく尋ねることは、ダリアにできない。

ドアマンが恭しく、モーゼの十戒のように両側によける。

ロベルトを先頭にして、中に入って行った。

ゴシック調の調度品で内装が整えられている。薄暗い照明で、流れるハードロックは最高潮だった。

何重もの扉を抜けて案内されたのは、VIP専用の控え室だった。そこに、二着の洋服が壁に掛けられていた。

その一つを手にとつてあきれたようにダリアはロベルトに向かつて言った。

「これ、貴方の趣味かしら？」

ふんだんにレースが使われた深紅のドレスだ。

しかも、背中が大きく開かれ、裾は長めだが大きくスリットが入っている。

「ゴスぽいけど、イブニングでもいけるだろ？」

得意気にロベルトが返事をした。

ご丁寧に同じ意匠のガーターベルトまで用意されていた。

アルゼルの方はというと、漆黒に銀色のピンストライプ模様入りのスーツだ。シャツは無難な白色と見せかけて、ダリアの花の透かし彫りの入った手の込んだ品だ。タイはお揃いの深紅だ。

「これに着替えて中にどうぞ」

ロベルトはアルゼルに一礼して言った。

「私は遠くから護衛させていただきます。御前失礼します」

あつと言つまもなく、ロベルトは姿を消した。吸血鬼の身体能力だ。

音もなく姿を消したロベルトの能力を見るたびに、吸血鬼と人の能力の差をダリアは感じる。

見習いとはいえ、吸血鬼ハンターであるからには、狩りの対象である吸血鬼についても研究をしている。

ダリアが唯一、吸血鬼に対抗できる方法は1分先の未来を読んで、強力なハーブの力で対処することだ。未来を読む力も、まだ一定に

使えるわけではなく、突然頭に閃く類いのものだ。

マイクロフトに寄れば、訓練すれば、自在に読めるようになるらしいが、そんな風になる前に、吸血鬼との戦いで負けているかも知れないのだった。

もつと確実に勝てる手段を見つけないと、生き残る確率は低いままだ。

もつとも、吸血鬼ハンターとはいえ最近では、ほとんど狩りをしていないのだという。

人間の犯罪の方が恐ろしいとマイクロフトは肩を竦めて話していたのを、思い出した。

「アルゼル様、先に着替えられますか？」

ダリアが尋ねると、アルゼルは柔らかに微笑んで女性から先にどうぞ、と言ってカーテンで囲われている部屋の一角をさした。

ダリアは一礼して、カーテンの中に入った。すぐに危険物がないか目を走らせる。

するすると着ている服を脱いで、ドレスに着替える。ガーターベルトには小型の拳銃が隠せるようになっていて、どこまでもロベルトの趣味に叶っているようだ。

着替え終わり、アルゼルの前に姿を現すとアルゼルは珍しく揶揄するような笑みをみせた。

「実に魅力的だね。このまま王宮に連れて帰りたいくらいだよ」

慣れない誉め言葉に、ダリアは顔を赤くした。ロベルトの誉め方は芝居がかっているのです、そこまで羞恥を刺激しない。

「アルゼル様もお着替え下さい。見張りをしておりますから」
照れ隠しに話題をそらしたダリアに、アルゼルは声を出さずに笑った。

「アルゼル様はクラブにはよくいらつしやるのですか？」

アルゼルがカーテンの向こうに消えたのを確認してダリアは尋ねた。

「そうだね。こういうのは王宮にはない楽しみだから」

楽しそうな声がカーテンの向こうから聞こえた。

「待たせたね。行こうか」

スーツの上にマントを羽織ったアルゼルは、古典的な吸血鬼のようだ。

エスコートするように左手を出されて、恭しくそれに答えようとして、慌ててダリアは手を引っ込めた。

「エスコートされていては護衛はできません」

ダリアは、少し後ろからついていくことにした。

「三指ついてお出迎え、三歩下がって夫に従うようだね」

残念そうにアルゼルは言った。

「なんかの格言ですか？」

「今は廃れてしまった、遠い東の島国のご婦人方の習慣だ」

第十一話：カクテルにはキールを

クラブのホールに通じる扉をあけると、さらにBGMのボリュームが上がった。吸血鬼の男が夜な夜な永遠の恋人を探してさ迷っているバラードが男の甘い声で歌われている。薄暗い店内に、時代錯誤のゴシックな服装をした若者たちが気儘に佇んでいた。

アルゼルが一步踏み込むと、ホール内の人の視線を一身に浴びる。まるで、時が止まったかのように、一瞬だけ静まり返った。

顔見知りがあるようで、気軽に挨拶をする人までいた。どちらかというと、女性の方が多いのは、アルゼルの容姿によるところが多いのだろう。

親しげに話しかけている所を見ると、アルゼルがまさか皇太子だとは思っていないようだ。

アルゼルの腕に自分の腕を絡ませているのは、目も覚めるような金髪の美女でレースがたくさん縫い付けられているゴシッククロリータのドレスを着ていた。

時折、アルゼルの背後にいるダリアに不信そうな視線を投げ掛けている。

「あの人はアルゼルの知り合いなの？」

しびれを切らしたのか、金髪美人がアルゼルに聞いた。ダリアに視線を向けたときの目力はそれだけで、人を殺せそうだ。

突き刺さるような視線をダリアはため息をついて受け流した。

アルゼルの正体を知っているだけに、嫉妬されたことに対して素直に喜べない。

こんなに凄い美人に恋敵に認定されるのはいつもなら、光栄なことだと思いが、相手が悪い。

アルゼルとはビジネスの関係だからだ。

「僕のお気に入りダリア嬢だよ」

お気に入りときた。

それを言われたときのダリアは目を皿のように大きくしアルゼルを見つめ、金髪美人はぎりつと歯ぎしりした。

どうやら、アルゼルは女性を翻弄するのが好きらしい。

アルゼルは然り気無く、それでもきっぱりと自分の腕にすがり付いている美人を引き剥がした。

「それでは、また、後で。リリース」

アルゼルは振り返ってダリアに着いてくるように顎で促す。黙ったままダリアが頷くとマントを翻し、アルゼルはカウンターに向かった。

カウンターに着くと、バーテンダーにアルゼルが注文をした。アルゼルはワインが好きなので、キールを頼んでいた。

「ダリアも頼むといいよ」

「でも……」

護衛中に飲むことに気が引けていると、アルゼルはにやりと意地悪な微笑を浮かべた。

「君がホワイトレディを好きなのは知ってるよ」

「一杯のんで限界かもしれませんよ？」

ホワイトレディはそれなりに度数の高いカクテルだ。

「君がザルなのは知ってるよ」

容赦のないアルゼルの返答にダリアは苦笑して、アルゼルの隣に座ってバーテンダーにホワイトレディを注文した。

「私のことよくご存じですね」

「自分の護衛につくからには調べるよ。些細なことでもね」

「だから、護衛が私でも驚かなかったんですね」

「能力については文章でしか知らなかったから、実際にみて驚いたよ」

お酒をシェイクするさらさらという、繊細な音が聞こえる。

「キールです」

赤褐色の液体が注がれたグラスがアルゼルの前に置かれた。

じっと意味ありげにアルゼルはダリアを見つめる。穴が空きそうな

ほど見つめられて、ダリアはいたたまれなくなって、アルゼルを見返した。

「その様子だと、聴かされてないようだね」

「何のことですか？」

「君が、私の花嫁候補の一人だということだ」

まるで、次は何を飲む？と聞くような気軽な口調でアルゼルは言った。

さりげなくアルゼルによって放り投げられた爆弾は絶大な効力をダリアに発揮した。

目はおろか、口まで大きく開けて、ダリアは停止した。淑女のする表情ではない。

「え？……なんて」

狼狽していると、バーテンダーがホワイトレディをダリアの前に置いた。

何者にもそまらない白い液体が少しだけ、恨めしいダリアだった。

第十二話：物語の始まり

アルゼルに改めて言われて、確かに自分は単純に身分から考えれば花嫁候補に引つ掛かったりするだろう。新世紀になっても時代遅れの身分というものに囚われている者も多いのだ。

「そういうことは、公爵令嬢にお鉢が回ると思っていました」

「公爵家には適当な年齢の女性がいないからね。それでも十数人いる候補のうちの一人だよ」

おかしそうにアルゼルは笑いながら言った。

「小さい頃、君は何度か離宮に遊びに来ている」

ダリアは田舎暮らしをしていた頃を思い返す。乳母と数人のハウスメイドたちとの素朴で温かで単調な毎日。

何度か、普段は着ないようなドレスを着せられてどこかに行ったのは覚えていた。

「アルゼル様にお会いした覚えはないのですけど」

「忘れた？」

キールを一口飲んで、アルゼルは隣に座るダリアに向き直って尋ねた。

どうという仕草ではないが、ひどく魅力的にみせる。

忘れた、と言いつらい雰囲気だ。

「アルゼル……」

話を続けようとした、ダリアは言葉を詰まらせると素早くスツールから立ち上がり、アルゼルの背後に移動した。

小さな悲鳴がして、アルゼルが振り替えると、ダリアが女性を抱きかかえていた。

生気がないかのような虚ろな目をした若い女が、アルゼルに倒れこもうとしていたのをダリアが抱き止めたのだ。

「良く気が付いたね」

「見えたんです」

ダリアは警戒しながら、女性を見ている。お酒の飲み過ぎではない、貧血でも無さそう。すぐに、この女性の連れが駆けつけてきそうなものの、誰も来る様子が無かった。

同じように彼女を覗きこんだアルゼルは、ダリアに危険を知らせた。

「まずい……彼女をそこら辺のソファーに寝かせて店からでるんだ」

「どうしたんですか？」

「居場所を知られるとは思わなかった……！」

ダリアは一人、事態を把握しているアルゼルにおいてけぼりだった。突然、ぐったりしていた女性があり得ない早さで体を起こすと、ダリアの首目掛けて長いつめの生えた手を伸ばしてきた。寸での所で、彼女の右手を捕らえるが、人間とは思えないバカ力に、ダリアはすぐさま振り払われる。

「逃げるよ」

アルゼルがさらにダリアに促す。流石に今のでなにか異変が起きたことを察したダリアはアルゼルと共に出口を目指す。

だが、同じように生気を無くしたような瞳をもつ若者たちに行く手を阻まれる。

「何ですか、あれは。まるでゾンビ……」

「まるでじゃなくてゾンビなんだなあ」

ダリアの問いかけに答えたのは、アルゼルではない。場違いなほど陽気な声がダリアの背後からした。

いつの間にか、ハードロックはなりやんでいる。

「誰……？」

アルゼルを背後に庇いながら、ドレスの裾をめくりガーターベルトから銃を引き抜いた。

「初めましてお嬢さん」

ステージの中央にいつの間にかいたのか、山高帽子を被ったスーツ姿の若い男が礼儀正しく一礼している。

燃えるような赤毛で顔立ちは、ダリアと年齢が変わらないように見えた。

彼の周囲には、ゾンビと言われたときの人達が彼を守るように蠢いていた。

登場の仕方からして尋常ではない。ましてや、得体の知れない取り巻きがついているとなれば、普通の人間とは言い難い。

状況からみて、ダリアやアルゼルたちと同じ側の人種なのだろう。

ダリアはそう判断して、警戒したまま赤毛の男を見据えた。

「レラ・リンドールと申します」

丁寧に名前など名乗っている。

「もっとも、覚えてもらおう前に、死んでもらうけどね」

ダリアは彼の台詞の途中から先を読んでいくかのように、懐からサシエを取り出して空中に放り投げる。

それが、レラの言葉にあわせて突撃してきたゾンビたちに命中した。半数がバタバタと倒れるように眠りにつく。

残りの半数が、呻き声をあげながらダリアたちに襲いかかる。

ゾンビと言われたとはいえ、拳銃で撃ち抜く訳にはいかない。

近づいてくる者たちをダリアは片端から蹴り倒して、アルゼルの身を守る。

アルゼルは半包围の状態にあっても、悠然と構えていた。

あわや、背後から飛びつかれそうになったところを、ダリアは回し蹴りをして防ぐ。

多勢に無勢でダリアが取り囲まれ、首筋に手をかけられた。体重をかけて押さえ込まれ、ダリアはもがくが抜け出せそうにない。

「俺の食料に勝手に手をつけないでくれたまえ」

聞きなれた偉そうな声がして、あっという間にダリアは掬い上げられた。

目の前の男の首にしがみついて、横抱きにされた不安定な体を支える。

「ロベルト」

クラブの更衣室で別れた、ロベルトが駆けつけたのだ。

「アニメ・ムンディの幹部がこんな所まででてくるとはね」

ダリアにはロベルトが腕を軽く振ったようにしか見えなかったが、あれだけ取り囲んでいた人々を一瞬で昏倒させた。

「やるじゃないか。ダンピールのロベルト」

「俺の事まで知ってるとは光栄だね」

全く嬉しそうには聞こえない声で、ロベルトは答えた。

ロベルトは後方にダリアを下ろし援護するように指示した。

「ここは、強力な結界で別空間にしたてあげられているようだ」

アルゼルが辺りを見回しながら言った。

「逃げるなら、結界を壊すしかないね」

「それなら話は早い……お嬢さん、練習の成果を期待しているよ」話をふられて、ダリアは慌てる。魔法の練習だとかで、魔方陣を描いて、力を使う練習はした。

だが、どんなに練習してもうんともすんとも言わなかった。

魔法は目に見えるものではないと言われても、ダリアは納得できなかった。

「では、私も手伝おう」

ロベルトがレラと対峙している間、アルゼルが慌てるダリアに言った。

「でも……」

護衛対象に手伝ってもらうのは、流石に気が引けた。

それでもいい募るアルゼルに根負けして、ダリアは一瞬に魔方陣を描き始めた。

第十三話：灰色の境界線

ロベルトがレラとゾンビ達を引き付けている間に、ダリアは懐から取り出したチヨークで床に魔方陣を描く。

魔方陣と言っても、半径1メートルほどの円を一つ描いただけだ。

「君の属性は？」

アルゼルの問いかけに、ダリアは水です、と答えてバーカウンターに走った。

ここには、液体が沢山並んでいる。ダリアは棚に並んでいるお酒の中でも沢山量の入っているビンを掴んで魔方陣の上に投げつけた。ブランデーの深い匂いが辺りに立ち込める。

「私は炎が属性なんだ。ちょうどいい」

アルゼルは、右手を翳して一言二言呟くと、床に零れたブランデーから炎が上がった。

魔法だ。

現象を確認してダリアは戦慄した。今まで物語の中だけの事がなんでもないことのように行われているのだ。

「アルゼル様……何者ですか？」

皇太子に対しての質問ではないとダリアも気が付いてはいたが、尋ねるしかなかった。

最初は、庶民の生活に触れたいだけの高貴な血筋の気まぐれだと思っていた。

話すうちに、ディオゲネスクラブの事を次期王位継承者として知っているだけだと思った。

だが、実際に彼はいと簡単に、限られた者にしか使えない魔法を使いこなしている。

「……そんな事より今は脱出した方がいいんじゃないかな？」

アルゼルの言うことも最もだったので、ダリアは円陣の中央にたち、呪文を唱えた。

「光でも闇でもなく、白でも黒でもなく、空と海の間、星ぼしのま
たたきの間、白に染まらず、黒に染まらず、それは灰。灰は光と闇
の間に、空と海の先に、星と月の境に。境界と境界を繋ぐのは灰。
我、今一度境界を引き直さん」

教えられた通りの呪文を唱えた。途中からアルゼルも呪文を唱え始
めたようだ。

魔方阵の円が光ったかと思うと、ダリアは全身をまばゆい光で包ま
れた。

激しい耳鳴りとめまいがして、徐々に光が弱まるのと同期するよう
にハードロックがフェードインしてくる。

そつと目をあけると、先程までいたクラブだ。

まるで時が止まっていたかのようにカウンターにはキールとホワ
イトレディが仲良く並んでいる。周囲の喧騒に飲まれまるで夢の出
来事だったのではと思わせる。

「見事だね。それに免じて今日は去ろう」
いつの間にか、レラが目の前に立っていた。

ロベルトがすぐにダリアを庇うように立ち塞がる。

「二度と会いたくないな。ゾンビ野郎」

「ダンピールには僕の芸術がわからないようだね」

くすくす、と女の子のように笑い、レラの姿がふっとかき消えた。

まるで、蠟燭の炎が消えるようだ。

「なんなのよ……一体」

ダリアはレラの消えた方を向いて呟いた。

第十四話：アルゼルとダリアとロベルトの関係

クラブでの騒動もひと段落しての帰り道は、誰も口をきかなかった。ダリアはアルゼルへの不信感で一杯で不機嫌だったので敏感に感じ取った他の二人は黙っていた。

夜空には、冷たい月が三人を照らし出している。その中で一人、ロベルトだけが白ぼんやり光っていた。吸血鬼の特徴だ。

アルゼルの護衛との合流ポイントまできて、アルゼルは重い口を開いた。

「君が知りたいと思っっていることは分かっているつもりだ。……今度離宮で鹿狩りが行われる。そこに来れば答えてあげよう」

「鹿狩りの後のパーティーへ出席すればよろしいのでしょうか？」

「鹿狩りから来てくれても構わない。もちろん、私のパートナーとして」

そんなことだろうと予測していたダリアはため息を心の中でついた。まさか、皇太子の前でため息をつくわけにはいかない。

ロベルトも何か言いたそうだが、さすがに黙っている。

護衛が車で迎えに来たのが分かると、アルゼルは去り際にダリアの右手を取ると、手の甲に唇をそっと落としてにこやかに微笑んで立ち去った。

「誰もいなくてよかったわね」

皇太子を乗せた車が夜の闇に消えるのを見送った後、ぼつりとダリアは呟いた。

皇太子アルゼルは、映画スターに並ぶ若い女性たちから恋愛に関する好奇心が寄せられている。

あわよくば自分が恋人になろうとする人も多い。何しろ、本当に「王子様」が迎えに来るのだから。

パパラッチが張り付いていることも多いというのに大胆なことだ。

「皇太子のこの仕事に関しては、誰と言えども報道はできないさ」

「パパラッチもグルなのね？」

「グルとは人聞きが悪いな、お嬢さん。凄惨な事を報道する必要もないだろう。協定だよ」

うまく丸めこまれた感じもするが、ダリアは渋々納得した。

「お嬢さんは、鹿狩りに行くのかね？」

「行くわ」

あれは、挑発行為だろうと思う。皇太子の護衛をするのなら、表舞台にでてこいと言うのだろう。

護衛が目立つわけにはいかないのだが、何か考えがあるのかも知れない。

「殿下は、色々と危ない橋を渡られている。日常的にそばに置いておける護衛がほしいのだろう」

「護衛ぐらいいるでしょ」

「普通の護衛ではての届かない刺客からの楯だ」

そういう事なら、ロベルトの方が適任だがロベルトはダンピールということもあって余計に目立ちすぎる。

勘の鋭い人間がロベルトをみたら、普通ではない何かを感じるはずだ。

「……アルゼル様らしい考え方ね」

国民の期待を一身に背負った王子様は、何事もそつなくこなすようだ。

ダリアがアルゼルの事に気を取られているのが気にくわないのか、ロベルトは舌打ちをして、無言でダリアを抱えあげる。

「ちよっ……これだと、頭に血が昇る……!!」

よりもよって、ロベルトはダリアを荷物のように肩に抱えあげた。両手ではなく、片手で軽い荷物でも持つかのようだ。

「さっさと帰るとしよう」

なんの弾みもつけずに、ロベルトは三階建ての建物の屋上へと跳躍した。コート裾が、蝙蝠の翼のようにひらめく。

足音もなく着地したロベルトは、口をパクパクさせて驚いているダ

リアを抱え直した。

「お嬢さん、明日の予定は？」

「ウィルアネス子爵夫人のお茶会に呼ばれてるわ」

端正な顔が目の前にあり、耳元で甘くロベルトに囁かれて、ダリアは頬を赤く染めながら答えた。

この顔の良さは卑怯だと思つ。見慣れて入るが、近づかれると鼓動が速くなる。

「では……そのお茶会は欠席だな」

いうやいなや、ロベルトは夜空を音もなく跳躍する。黒い風のように、跳んでいるにも関わらず、顔は皮肉げに微笑んでいる。

その笑顔を見せるときは、大概自分にとって良くないことが起きるので、ダリアは顔をひきつらせながら尋ねた。

「何をやる気？」

「ダリアを喰らう」

楽しげにロベルトは囁いて、ダリアの反応を確認する。

先程まで、うつすらと赤かった顔が、青白く変わっていく。そして、何を想像したのか、再び顔を赤く染めた。

「私が倒れるまで、やるうって言うの?!」

「殿下ばかり構うからさ」

屋敷の屋根に着地し、屋根裏部屋の窓から侵入する際に、ダリアを横抱きに変えて、意地悪くけれど甘く囁いた。

ダリアの部屋は、清潔に保たれていて、メイドがベッドメイキングしたらしくベッドには、シワひとつよっていない。

新雪のように、平らなベッドにダリアを横たえてロベルトは馬乗りになった。

「貧血にで立てなくなったら、暫く血は吸わせないから」

「分かっている、ダリア」

優しく微笑むロベルトの背に見慣れた天井が目に入る。

目覚めたら日が高くなっているのだらうかと考えながら、そっと近づいてくるロベルトの顔にあわせて、ダリアは瞼を閉じた。

第十五話：一夜明けて

予想していたこととはいえ、ダリアは翌日、貧血になっていた。幸いなことに、貧血になりやすい体質だと、周囲は理解しているようで、まったく怪しまれない。

普通、栄養士の資格のあるコックが考えた献立なのだから、貧血になるのはおかしいと誰かが気が付きそうなものなのに。

もしかして、暗黙の了解だったりするのだろうか。

だとしたら、平然と私の目の前に朝食を並べるフットマンは相当な食わせモノだ。

ダリアは、手早く並べられていく朝食をぼんやりと見ながら思った。朝食はいつもと同じようだ。薄く切った食パンはカリカリにトーストされ、二枚、白い皿の上に乗っている。パンに添えるジャムは、領地内で採取された黒すぐりの実を、癖のないレンゲの蜂蜜と、三温糖で煮込んでいるものだ。まだ、黒すぐりの実の形が少しばかり残っていて、甘酸っぱさが口に広がる。サラダボウルには、色とりどりの野菜がうず高く品よく盛られている。ドレッシングは、コックお得意のサルソースでほんのり唐辛子がきいているのがまた、良い。朝のお茶はミルクティーというのが定番で、ダリアは紅茶を先にカップに注いでから、ミルクをそつと入れるのが好きだ。夕日色の水色に、雲のようにミルクが広がって綺麗だからだ。

茶葉は、アッサムが好ましいが、日によってはウバにするとときもある。フットマンが茶葉の種類を毎朝朝食前に訊いてくるのは、ダリアがこの屋敷に住み始めてからの習慣だった。

シンプルだけど、美味しい朝食は長いテーブルにダリアだけが座り、フットマンからの給仕をうけている。近くには、家令のレイモンドが彫像のように立っている。

週の大半はこうして一人で食事をとっている。ダリアの父も母も社交界の用事か、領地内の問題か、そんな仕事で屋敷にいないことも

多い。

父親が忙しいのは、例の倶楽部でマイクロフトから無理難題の依頼を受けているからとして、母親は何故忙しいのだろうか。

他の高貴な身分の奥方は貧乏だけれど、ハンサムな若者に熱をあげて楽しんでるようだけれど、うちの母はそれには当てはまらないように見える。

……どちらかというと、あの倶楽部のメンバーの一人だと言われた方がしっくりくるほど破天荒だ。父はそれを、天真爛漫だと評していたが、それは惚れ過ぎて眼が曇っている証だ。

トーストにジャムを塗りながら、ダリアはとめどなく考えを紡いでいく。

ダリアは彫像のように動かないレイモンドに両親がいつ帰ってくるのかを尋ねた。

「週末にはお帰りになられるご予定です」

「どちらに行かれたの？」

「旦那様は領地内のトラブルの解決に。奥様はそれにご同行されました」

淀みなくレイモンドが答える。

おそらく、執事のスチュアートからレイモンド宛に定時報告があったのだろう。大概、父の仕事で外に出るときには、執事のスチュアートを連れて出て行くことが多い。執事は、今でこそ家の仕事を一般的に取り仕切る仕事だと思われているが、昔は家の主の補佐の役目をするのが仕事だった。変わりに、家のことを取り仕切るのは家令の役目とされていた。そのような習慣が残っている家は珍しいが、両親が頻繁に屋敷を留守にするうえ、父親の仕事は少し変わっている、となれば執事と家令が存在してもおかしくはない。

最も、この屋敷に来るお客様は家令のレイモンドが「執事」で執事のスチュアートが良くできた「フットマン」だと思っている人が多い。レイモンドが初老の男性なのに対して、スチュアートは、三代前半の男性である。そう思われても仕方がない。

ダリアは、スチユアートの仕事ぶりを以前、間近で見ることがあった。父親の執務室にある時代遅れのマホガニーのテーブルに、これもまた時代遅れの家紋入りのレターセットをセットしたり、今だに使用しているインク壺にインクを補充したり、少しでもずれている書類があれば、整えたりと非常に神経質で細かい作業をしていた。相手の使いやすいように、気を使っておかれた小物の数々は、ただ置かれていたよりも意味を出していた。事務作業は、恐ろしいほどに完璧に優秀なだけけれど、父のことだ、事務作業だけのためにスチユアートを雇っているとダリアには思えない。

「お嬢様は、くれぐれも今度のお茶会で粗相がないように、作法を学ぶようにとのだんな様のお言いつけでございます」
ダリアは、苦味をつぶしたような表情になった。誰にも、一言も皇太子からお茶に誘われたなど言っていないからだ。どこからそんな情報を父は手に入れたのだろう。蛇の道は蛇とはよく言ったものだ。ダリアは、カリカリにトーストされたパンを齧って、レイモンドに神妙そうに頷いた。

第十六話：家庭教師との戦い

作法の勉強ということ、先生が呼ばれていた。妙齡の女性だ。今の裾の短いスカートではなくて、ふくろはぎまでの長さのワンピースを着ている。

髪の毛をきつちりとひつつめにしてる姿を目にしたダリアは、一目で「マズイことになりそうだ」と思わず呟いた。

マナーハウスに住んでいる時にもこの手のきつちりした生真面目な家庭教師を相手にして反りが合わなかったことを思い出したのだ。

どうやって、こういう人を見つけってくるのか、決まって「女の幸せは結婚です」と言うのだ。

今時、そんなことを言うのか、とダリアは呆れたのだった。

「ダリアお嬢様、家庭教師のクリスと申します」

完璧な動作で、優雅にお辞儀をして挨拶をするのを見て、ダリアはさらにうんざりした。

それでも、「よろしく」と笑顔で返答したことを自分で誉めてやりたかった。

家庭教師による礼儀作法の時間は、予想とまったく違わず「貴族の令嬢が話して良い話題」や「結婚が女の幸せ」や「子供を生み育てるのが義務」といった内容でダリアは辟易した。

「女の幸せは結婚」というのは、結婚した人が感じることであって強要することではない、とダリアは思う。

前時代的な考え方がまかり通るのが貴族社会なのだ、とダリアは痛感した。

社交界にデビューするということが、貴族の令嬢にとって今後の人生を決めかねないほど重要なのは分かっている。問題なのはその時期だ。普通、社交界デビューはシーズンと呼ばれる6月で、公爵家

の晩餐会に出席することが多い。公爵家ともなれば、招待客も多いので良いお披露目になるからだ。

ただ、ダリアは違った。

ダリアはシーズンよりもはやく皇太子のお茶会でお披露目になってしまうのだ。

皇太子のお気に入りに入り、お妃候補と世間に思われても仕方がないほど状況証拠がそろっていた。

アルゼルが結婚相手として不満があるわけではない。身分だけ考えたら、この上なく良い。性格も、ダリアが知る限り付き合いやすそうである。

しかし、自分が皇太子妃、やがては王妃になるというのは柄じゃないと思う。

それにロバートだっているのだ。あの見目だけは、アルゼルよりも整った吸血鬼と人間のダブルは、食料と位置付けているダリアを簡単に手放しはしないだろう。

一日目はなんとか作法のレッスンは耐え抜いたが、二日目は耐えられそうになかった。

ダリアは適当な口実をでっち上げて、レッスンを短縮する方法をとることにした。

吸血鬼に関する情報を集めてほしいとロバートは言っていたので、この間知り合ったを家に招待することにした。

第十七話：吸血鬼の噂

アーネットは、典型的な貴族のお嬢様で、午後のお茶会に招待したダリアはその完ぺきな礼儀作法に舌を巻いた。

アーネットの家柄も皇太子妃候補になるには十分な血筋なので、小さい頃から躰けられたのだらう、ダリアのように若干無理のある所作ではない。

アーネットをお茶会に呼んだのは、気の合わない家庭教師との戦いをするよりも幾分もマシに思えたのと、ロベルトから吸血鬼に関する情報を集めるように言われたからだ。

夜会で会った同じ年頃の少女達の中で、アーネットが一番、この手の話に詳しかった。ゴシップ好きと言うよりも、都市伝説や妖精の話が好きなタイプではないかとダリアは考えていた。

中庭に手入れをされた、東屋があり、そこから見るバラ園は今が盛りであった。家令であるシチュアートに勧められた場所だけあって、公爵家に相応しいお茶会の場所だった。

シチュアートが、薄い白磁のカップにダージリンを注ぎ込む。爽やかな匂いが広がり、紅茶を淹れた人の腕の良さを伺わせる。

ダリアは、礼儀作法通りアーネットにお茶を勧めた。アーネットは、礼儀作法の見本のように優雅にカップを手に取ると一口、口をつけた。

「ちよつと怖い 話が聞きたいのだったかしら？」

「不思議で怖くて素敵な話が良いです」

アーネットは少し考えて、言った。

「私も人から聞いたはなしだから、詳しいことは分からないけれど良いかしら？」

ダリアが頷くと、アーネットは興味深い話を始めた。

なんでも、ロンドンの数多くあるハブの中には人身売買の窓口にな

っている店があるのだという。

知らなくて見せに入った見目の美しい清純な少女は、酒に睡眠薬を入れられ、眠った隙にロンドン郊外の屋敷に運び込まれ、オークシヨンにかけられるのだという。

オークシヨンのお客様は、立派な紳士、淑女に見えるが本当は、少女の生き血を飲まないと生きていけない人達らしい。

かくして、少女は哀れ生き血を啜るモンスターの餌食になったのでした。

最近、少女の行方不明者が多いのはこのことが原因なのだという。

アーネットの巧みな話術に、本当にあった事件ではないかと思わせる。

ロベルトの話を聞く限りだと、オークシヨンで血を手に入れるぐら
いなら、誰かをたらしこんで、仲良くときには恋人同士のようにや
った方が楽で確実らしい。

真実と嘘がうまい具合に混ざっているのだろう。

ダリアは、これ以上アーネットから情報は引き出せないかもしれな
いと判断した。

話題は次第に、少女達が興味を示す、ファッションや俳優達の話し
へと移っていった。

第十八話：お茶会まで

皇太子アルゼルと、狩りにいくというのは、やはり一大イベントである。ダリアは、他の貴族たちのお茶会に毛が生えた程度だと考えていたら、大間違いであることに気が付いた。

ダリアが、皇太子の側について狩りに参加すると知った一族たちは大挙して杉の木屋敷にやってきた。

アルゼルとの仲を取り持つてほしいというものや、狩りの共をしたいという者、はては、狩りの時に着る服やお茶会のドレスの見たてまでする者が現れた。

今まで会った事の無い人まで、親しげに話しかけてくるので、ダリアは一気に親戚が増えたように感じた。

一番手強いのは、ダリアと同じ程度の年齢の娘のいる母親を相手にする事だった。

あわよくば、自分の娘がアルゼルとの親しい仲を、ダリアに取って変わればいいと思っているので、悪意に満ちた言動にダリアは辟易した。

口では、ダリアがアルゼルに気に入られた事を笑顔で讃えておきながら、それでも、瞳は笑っていない。

いっそのこと、アルゼルは自分の対吸血鬼との能力に期待しているのであつて、女として見ているわけでは無いと言ってしまったかった。とは言え、トップシークレットにもなっている事を、しつこい親戚対策に言うわけにはいかなかった。

ダリアは、狩りの時に着る服は、華やかな乗馬服を、お茶会の時はシンプルなドレスにした。

煩い親戚を相手にしているときに、アルゼルからダリア宛に電話があり、娘をダリアよりも、アルゼルに近づけようとする親戚は、耳を側だてて一言も聞き漏らさぬようにしていた。

「今夜……ですか？」

叔母が聞き耳を立てているのに気がつきながら、ダリアは突然のアルゼルのさそいをリピートした。

「そうだ、綺麗な薔薇が咲いていてね。大変風雅なんだ」

「薔薇を夜見てもあまり見えないと思います」

ダリアが、躊躇しているとアルゼルの優しい低音の笑い声が、軽やかに受話器越しに聞こえた。

「私の誘いに、Yes以外の答を聞いたのは初めてだ」

ダリアは、失礼な答え方だったかと、顔を真っ赤にして、行きますと答えた。

電話を終えて、叔母をみるとにやりと笑っていた。

「うちの娘も連れていっていただけのわね？」

有無を言わせない迫力に、ダリアは黙って頷いた。

どうせ、断ればどれだけ自分もダリアを世話してきて、愛情を注いだのか再放送するに決まっている。

叔母の名前は、今日初めて知って、娘には一度も会った事がなくとも。

ダリアは、世の中の知りたくもなかった面倒な関係に、嫌気がさしたころロベルトと会った。最近、彼は別の厄介な事件に関わっているようで、食事にくる事もなかった。

夜中に、バルコニーから招き入れられる姿は、正当な吸血鬼の姿だった。

「ヴァチカンが、なにやら動きだしたようだね」

優雅に長椅子に腰掛けるなり、ロベルトは忙しかった理由を話しました。

ヴァチカンは、昔からカトリック教会の総本山で、裏の顔は神父たちが吸血鬼との長い戦いを繰り広げている。

ダリアは、ディオゲネスクラブに入って初めてだ知ったことだった。もっとも、そのような戦う神父はほんの一握りと言うことらしい。

対吸血鬼戦において、ディオゲネスクラブとヴァチカンと能力、技術を比べると頭ひとつ抜きん出て、ヴァチカンの神父たちが優秀で

ある。経験において、ディオゲネスクラブのメンバーは足りなかった。

「何をしようというの?」

「吸血鬼撲滅に向けて零番隊を発足させるらしい」

「吸血鬼撲滅?」

「優秀な神父達を集めて組織だてて、狩りにいくんだそうだ。……

今までは、自分の教区に問題のある吸血鬼がいたら退治する方針だったが、教区に関係なく動かせるようにするのだそうだ」

ヴァチカンには、吸血鬼による犯罪が増えていると考えている。普通の人間では捕らえられないから、特殊能力のある人間に専任させようというのだ。

吸血鬼側も、ヴァチカンの神父とわかるやいなや、首を跳ねるなどしているほど、根は深い。

「まるで、戦争みたいね」

ダリアのつぶやきに、長く生きているロベルトは悲しそうに笑った。

第十九話 いとこと私とアルゼル

強引な叔母から同行を押しつけられた、いとこには、初めて会った叔母に似て、困った性格なのかとダリアは予想外していたが、以外と常識人だった。

常識人というには、変わっているが、ダリアの困ったことにはならなそうである。叔母が、娘を紹介して立ち去った後、開口一番に「私、彼氏いるから」とのたまったのだった。

「ジョセフィー又は、彼氏がいるの？」

驚きのあまり、教科書の文例の様な質問をダリアはした。

「ジョゼって呼んで？」

小首を傾げておねだりをする様は、キラキラして砂糖菓子のような女の子である。

「ママには内緒だけど、寄宿舎で付き合ってる人がいるの」

「そうなんだ。クラスメイト？」

「先生」

いたずらっ子のように、ジョセフィー又は笑って舌をだした。そうだが、普通、貴族のお嬢様なら、女子校に行くから異性と付き合うなら、校外か、先生しかいないではないか、とダリアは気が付いた。

「だから、私、いくらかつこ良くても、殿下のものになるわけにはいかないの」

母親が、しつこいから会うだけ会うけど、とジョセフィー又は溜息をつきながら言った。

寄宿舎の学校の先生ということは、それなりに教養はあるが、所詮、労働階級の間人なのだ。典型的な貴族である、叔母一家は、労働階級の間人との結婚はおるか、交際すら許さないだろう。ジョセフィー又は、親に説得されて、恋人を諦めるか、恋人と駆け落ちするしかないのである。

「殿下だって、乙女の方がいいだろうし？」

ジョセフィーヌは、含みをもたせてダリアを見てほえんだ。恋人の先生とは、行きつくところまで、行き着いたと言いたいのだろう。ジョセフィーヌのオープンな性格にダリアは、苦笑した。そんな事は、訊いてないのだが言わずにはいられなかったのだろう。

「殿下には、お話をしてあるから、今日は一緒に参りましょう」

夜に薔薇を見にこないか、というロマンチックな誘いに、連れを同行したいとダリアがアルゼルに伝えたところ、アルゼルは苦笑ぎみに、了承した。まさかデートの誘いに、紹介したい女性がいますと返答されるとは思わなかったようだ。

「殿下には、うまい事言つて、適当に流して欲しいなア」

あの母親とまるで正反対のやる気のなさだ。ダリアは、ジョセフィーヌに寄宿舎でのなしを聞きながら、アルゼルが迎えによこした車に乗った。

行き先はもちろん、宮殿である。宮殿のアルゼルの住まいにある中庭の薔薇が美しく咲いているのだ。

さすがに、アルゼルが迎えによこした車だけあって、ゲートではノーチェック、住まいでも簡単な身体検査があっただけだ。

案内されて連れてこられたのは、薔薇園に続く東屋だった。生垣があるのも、薔薇園は見れないが、良くていれされた小道を歩いてきたので、ダリアの気分は清々しい。

東屋で、出された王室御用達の紅茶を飲んでみると、すぐにアルゼルが現れた。

公式の場ではないので、シャツにノーネクタイだが、色合わせといい、着こなしいい上品で、アルゼルによくにあっていた。薄いピンク色のシャツがアルゼルのイメージとは違うが、そのギャップが良い。

ダリアは、ジョセフィーヌをアルゼルに紹介すると、ジョセフィーヌは形ばかりのあいさつをした。アルゼルも慣れたもので、鷹揚に返答する。連れがいることをあらかじめ伝えていたので、アルゼルは、弟のギルバートを連れてきていた。

すぐにアルゼルは、ダリアの手を取り優しく微笑みながら薔薇園へ
のエスコートをした。ジョセフィーヌもギルバートにエスコートさ
れている。

「君といると斬新な経験を味わえるね」

「申し訳ありません。殿下」

やっぱり、デートの相手から女の子を紹介された事などなかったの
を、揶揄しているのだとダリアは思った。

「君といると飽きないということだ」

アルゼルは、楽しそうにクスクス笑っている。

生垣に囲まれた小道をぬけて、視界が広がると、幻想的な光景がダ
リアのメニユーに入った。

色とりどりの薔薇が一面に咲き乱れ、ぼんやりと光っているのだ。

薔薇と薔薇の株の間に、優しい光の灯りが置かれ、薔薇の花を照ら
しているのだ。

ダリアは、月の光と灯火の両方からの灯りを受けた、薔薇に見惚れ
ていた。

魅入っているダリアにアルゼルは、満足そうに口の端をあげた。

第二十話 戯れ

「この薔薇を君に捧げよう、と言ったら、ダリアはどうする？」

冗談半分で言っているのか、アルゼルの声音には笑みが含まれている。この薔薇と言っているのは、一本ではなくて、薔薇園全部の薔薇を指している。

ダリアも、アルゼルの会話を楽しみたい性格を見抜いていたので、余裕の微笑みを見せて答えた。

「私の部屋が薔薇で埋れそうですね」

「そうなった部屋に招待してくれるかな？」

「父の許しがあれば、どなたでも」

ダリアは、夜風に乗って香る薔薇の匂いを楽しみながら、薔薇園を歩いた。付かず離れずの距離感で、アルゼルも共に歩いている。

「狩りの準備はしてる？」

「準備と言っても、服ぐらいでしょう。殿下のスタッフのほう、今はお忙しいのでは？」

「しっかり準備した方がよいよ。必ず、何かあるから」

アルゼルの含みをもった言い方に、ダリアは嫌な予感がした。

「まさか、ゾンビ使いが襲撃してくるとかですか？」

「結構な確率で来るだろうね。どうやら、私が邪魔のようだし」

「殿下！ 危険なのが分かっているなら、狩猟祭はおやめください」

「やめても別な時に来るさ。君たちの警備も厳重にしてもらっている」

呑気なアルゼルの構え方に、ダリアの方が気を揉む。

「当日は、私が付かず離れず御身を御守り致します」

ダリアは主に忠誠を誓う騎士のように誠実にアルゼルに言った。アルゼルは、ニヤリと企みが上手くいったと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「そう言ってくれると思っていたよ、私のダリア」

アルゼルは、ことさら「私の」を強調してダリアの腰に手を置き、力任せに自分の方へと引き寄せた。ダリアは、突入の事に、されるがままアルゼルの懐に飛び込む。

「あら、お邪魔だったかしら？」

申し合わせたように、ジョセフィーヌが姿を表し、まるで抱き合っているようにみえるアルゼルとダリアにこえをかけた。

「ち、違うの、ジョセフィーヌ」

アルゼルに、抑え込まれるように、抱きしめられているダリアは、恥ずかしさから、顔を赤くしているが、アルゼルの腕の中にまだいるため信用されていない。

「私は、あちらの方をみてきますわ」

気をきかせたつもりなのか、ジョセフィーヌはくすり、と笑ってギルバートにエスコートされながら、ダリアたちこら見えない位置へと移動した。

「なかなか物分かりが良くて、助かるね。たいていは、修羅場になるなら」

「その内刺されますよ。女性の恨みは根深いですから」

「気をつけておこう。ダリアが嫉妬深いということをね」

「私のことじゃありません」

ダリアがムキになって答えると、アルゼルは堪えきれなくなったのか、声をあげて笑った。

「付かず離れず守ってくれるなら、仲睦まじい振りをしないとね。」

ボデイガードと見破られるなら、君が近くにいるいみはないからね」

「心得ました」

ダリアの素直な返事に、アルゼルは満足そうに頷いて、ダリアの頬に手をかけた。

ダリアが、キョトンとした表情でアルゼルを見返すと、おもむろにアルゼルの切れるな顔が近づきダリアの頬にキスを落とした。

見る間に、ダリアの顔が燃えるように赤くなる。

「な、な、なにするんですか！」

「ダリアは、血を吸われるのは平気なのに、こういうのは免疫力ないんだね」

面白い玩具をみつけた、と、言わんばかりのアルゼルの楽しそうに笑った。

第二十一話 お妃候補の行方

アルゼルは、メディアで紹介されているような、優しい絵に描いたような理想の王子ではない。

それは、広告塔としての顔で本質は、人の事をからかうのが好きな性質のようだ。今も、ダリアの反応に楽しそうに微笑んでいる。

「殿下、笑すぎです」

「君には本当に飽きななさそうだ。君を花嫁候補に選んだ、母上に感謝せねば」

「女王陛下が、私を推薦されたのですか？」

「ああ、普通は侍従たちがリストを作成するのだから、きみだけは女王陛下のお墨付きだ」

女王陛下のお墨付きということは、ダリアの魔女としての力があつたことを予測していたのだろう。アルゼルも、闇に足を踏み入れるなら、同じ力を持つ者を、側におこうと考えてもおかしくはない。

これから、お妃候補のマスコミ合戦が激しくなるとダリアの周囲も騒がしくなりそうだ。おそらく、マスコミはダリアが女王陛下のお墨付きなのを知っているだろうから。

「狩猟祭を楽しみにしているよ」

アルゼルは、ダリアに手を差し伸べた。ダリアは、その手の上に自分の右手を重ねた。

もう、夜の密会の時間は終わりのようだ。アルゼルとギルバートがそれぞれ、ダリアとジョセフィーヌを宮殿のゲートまで送る。

迎える車がきて、ダリアとジョセフィーヌは乗り込んだ。

「お妃候補決定で感じね」

ジョセフィーヌは、ダリアに微笑んだ。

「そう見える？」

ダリアは不思議そうに聞き返した。

「大恋愛とか、そういうんじゃないくて、二人が並んでいるとしっく

りくるというのかな。一人だと難しいことを、二人だとやりそうに見えるもの」

ダリアは、ジョセフィーヌの観察眼に感心した。事実、ダリアはアルゼルのもう一つの仕事である吸血鬼などの闇の生き物に対するの護衛をしている。

そんなことは、おくびにも見せずダリアは、苦笑した。

「他にも有力な候補者はいらっしやるし、私は、妃殿下になるのは考えられないわ」

もし、なるとしたらそれは身代わりとしてだろうと思う。妃殿下として身代わりになり死ぬ役目を与えられたときだ。

ディオゲネスクラブは、小説から抜け出てきたような憧れの組織ではあるが、一人一人の役目が重く、身も心も王家に捧げる騎士のような対応を求められる。

「ダリアは、どうなの？ 殿下を愛してるの？」

ジョセフィーヌには、照れがないのか率直に聞きたいことを平気で口にする。

「敬愛してるわ」

これまたダリアも予想していたのか、照れずにしらっとした顔で答えた。

「ずるい、ごまかしているわ」

「誤魔化してないよ。さ、ジョセフィーヌ、家についたわ」

タイミングよく、ジョセフィーヌの住まう屋敷についた。ジョセフィーヌは、寮生活なのだが、今日のために外泊許可をもらい実家に泊まることにしたのだという。

ジョセフィーヌは、口を尖らせて不満そうであったが、渋々と車から降りた。

「私、年の近いところがあるの知らなかったの。メアド教えて」

ジョセフィーヌは、携帯電話を取り出している。ダリアも悪い気はしなかったので、携帯電話をとりだす。自分のアドレスを送信ようにセットして、携帯電話を握った手同士を軽くぶつけ合った。振動

を合図にデータ送信され、お互いの携帯電話にお互いのアドレスが保存される。

「じゃ、メールしますわ」

急に口調を変えたジヨセフィーヌを不信そうに見返すと、屋敷から執事がでてきたところだった。

「どうやら、ジヨセフィーヌは家ではそれなりにお嬢さんらしくしているようだ。」

切り替わりのはやさを、おかしく感じながらダリアは、ジヨセフィーヌの屋敷を後にした。

家に帰ると、窓辺に腰掛けて不機嫌そうなロベルトが待ち構えていた。

「明かりもつけずに佇んでいるので、ロベリアの肌が白く薄ぼんやりと光っている。」

「どこに行っていた？」

恐ろしく冷めたロベルトの声に、ダリアは背筋に寒気がはしる。こう言うときのロベルトは、近づかないほうが良いことをダリアは経験上知っている。

「王宮に」

ダリアは、回れ右をして逃げたかったが、ロベルトが素早くダリアの両わきの壁に手をつけて逃げられない様に囲んだ。

「誰に会っていた？」

「アルゼル殿……」

ダリアが、答えるよりもやくロベルトは、ダリアの白い首筋に牙を立てた。ダリアは、息を飲む。

「ちょっと……ロベルト！」

ダリアがロベルトの吸血行為を止めようとするが、ロベルトはダリアの両手を片手で押さえ込み、ダリアに口付けをした。

第二十二話 事件への糸口

やっぱり、というか予想通りというか昨夜はロベルトにしつかりと血液を提供してしまったダリアは、貧血気味でベッドから出るのも億劫だった。

？ロベルトの不機嫌の理由がわからないほど、ダリアは初心ではない。嫉妬から来るものだとはい分かってはいるが、食料にまで嫉妬するロベルトの狭量を理解できなかった。

？デオゲネスクラブからのメールと、ドキュメントの整理をしなからのんびりと午前中を過ごした。午後からは、昔の考えに染まった家庭教師との戦いがダリアを待っている。

？今のうちに、鋭気を養っておく必要があった。

？ダリアは、以前から収集していた吸血鬼に関する噂話の一覧を眺めた。だいたい集まってきたが、一つ一つデマゴークかどうか検証はまだ、していない。

？吸血鬼な話しに興味を示しているのは、ちょうどダリアぐらいの年代の女子が一番多い。恋人が、吸血鬼だと良いと望む女子が意外と多くて、ダリアは統計に呆れた。

？？目撃されている吸血鬼もさまざまで、特に実害は無いように見える。スコットランドヤードから手に入れた、通り魔と思われる事件の発生場所と噂話の広がっている場所を重ねても、関連性は見出しなかった。

？？他に、手に入れたデータは、謎の秘密結社「アニマ・ムンデイ」が関わっていると言われている建物の所在地だ。

？アニマ・ムンデイに、関してはあのマイクロフトに尋ねても「女王陛下に仇名す者達だ」としか教えてもらえなかった。その言い方に、浅はかならぬ因縁があるということ、ダリアは理解した。

「あ、これは……」

？？ダリアは、パソコンのディスプレイに表示されたロンドン市内

の地図をみて絶句した。

??? ロンドン市内の地図には、先ほどの噂話の発生場所がピンク色の丸い点で、アニメ・ムンディのアジトを黄色い四角形で表示している。その位置がほとんど重なるのだ。

「何かに関わっていきそうだとは思ったけど」

??? どうやら、あの不思議な能力の持ち主たちは普通の人間たちに多いにその力を目撃されているようだ。

??? さらに、通り魔事件発生場所と重ねると完全に一致する場所が二箇所あった。いずれも、人通りのさみしい場所だ。

??? ダリアは、完全一致した場所の事件と噂話をデータベースにアクセスしてピックアップした。

??? これから、読み始めようというところで、時間切れになった。??? 家庭教師が来たのだ。

「御機嫌よう。先生」

??? ダリアは、開いていたノートパソコンを、閉じて部屋に入ってきた家庭教師を迎え入れた。

??? そういえば、この家庭教師にはまだ吸血鬼に関する噂話を、聞いていなかったことにダリアは気がついた。

??? もつとも、堅物なので答えてくれるとは思ってはいないので、後回しにしがちだった。

「先生で、噂話好きですか」

??? 案の定、生真面目を絵に描いたような彼女は、眉根を寄せてダリアを見返した。

「噂話は、淑女がするようなものではありません」

「でも、ロンドン子ならゴーストの話は好きでしょう? 先生は、何かこの世のものでは無いのを見たことはあつて?」

新聞に、ゴースト目撃情報が記事になるような国だ。お化けの類の噂話は好きな人が多い。人の悪口では無いため、淑女が話題にしてもあまり咎められない。

「残念ながら、ご期待には添えません」

「そうですね、最近ケンブリッジのあたりでお化けがよく出没すると聞いたから」

？ダリアは、家庭教師の発音がケンブリッジ訛りがある事に気がついていました。出身がケンブリッジである可能性が高い。

今まで、生真面目な家庭教師には吸血鬼の噂について聞かなかったが、通り魔とと秘密結社の地図が一致する地点のひとつがケンブリッジとなると聞かざるを得なかった。

みた事も、聞いた事もなさそうな回答にダリアは、彼女は安全かもという判断をした。

第二十三話 シャーロック登場

狩猟祭前の慌ただしい中、ダリアはディオゲネスクラブに来ていた。調べた結果をマイクロフトに報告するためだ。

談話室に入ると、見慣れない男性がマイクロフトと話をしていた。

背がすらりと高く、鷲鼻にタカのように鋭い瞳。

まさか、という気持でダリアは彼を見ていた。

マイクロフトが、ダリアに気がついて話し相手の男に客人が来たことを知らせる。

ここは、昔ながらの礼儀が残っている場所でマイクロフトが、まずダリアに自分の話し相手を紹介する。

「私の弟のシャーロックだ」

あの、初めてマイクロフトに会ったときに噂をしていたシャーロック・ホームズの名前を継ぐ人物であると、ダリアは直ぐに気がついた。

小説の挿絵のシドニー・パジェットの絵から抜け出たかのような容貌だ。??シャーロックの名前に相応しく、眼光がするどい。

?マイクロフトがダリアを紹介すると、シャーロックは人当たり良さそうに握手をし、得意の推理をみせた。

「ダリア嬢、貴女はロンドンでの暮らしは最近ですね?」

?シャーロックは、相手に問うように尋ねたが殆ど確信を持っている様だった。

「そうです、父に呼ばれてロンドンに来ました」

「それまでは、リバプールに居ましたか?」

?何処に住んで居たかというのが、分かるものは身につけていないダリアは、驚いて目を見張った。

?小説で読んだシャーロックが同じように相手のことをずばずばと当てているシーンがあったからだ。

「何故、わかつたんですか?今日着ている服は、ロンドンで購入し

たものですし」

「シャーロックは、茶目つ気たつぷりに微笑して答えた。

「貴女には、訛りがあります。よく聴かないとわからないぐらいですが」

「??ダリアは自分では自覚していなかった発音に言及されて、キョトンとしたあと楽しそうに笑った。

「本当に小説のシャーロック・ホームズと同じ事ができるのね! 凄いわ」

「??感激しているダリアに、シャーロックは、気取った会釈をしてみせる。

「それで、本当のところはどうなの? マイクロフトの弟ではないのでしょうか?」

「??ダリアの指摘に、逆にマイクロフトが驚きに顔色を変えた。

「ダリア嬢は鋭いところをつくね。人は誰でも私とシャーロックが兄弟なのを疑問にもたない」

「兄弟と紹介されたのを疑ったりしないわ。私は、兄弟ではないのを知って居たから」

「??ダリアの種明かしに、マイクロフトは誰が話したのか直ぐにわかったようだ。

「ロベルトの仕業か」

「??少しかだけマイクロフトは、いまいましそうに言った。

「良かったら、シャーロックにも見て欲しい報告書があるの。二人の推理を聴かせてほしいわ」

「ダリアは、作成したデータのメモリを備え付けのマホガニーテーブルに乗っているノートパソコンに差し込んだ。

「??あらかた、ダリアが調べた事を説明するとまず、シャーロックが口を開いた。

「僕が思うに、ケンブリッジの近くで最近ペットの死骸がよく転がってないか住人に聞いたほうがいいと思う」

「私も同意見だ。ペットの他に野鳥なんかも候補に入れるべきだ」

??ダリアは、自分の報告からどうしてそのような回答が導けるのか分からない。

「しばらく、ケンブリッジ大学の生徒にでもなって、噂を集めて来たらどうかね？」

??マイクロフトは、他愛ないことのように提案した。

「それがいい。学生に変わったクラブ活動が流行ってないが聞くのを忘れてはならないよ」

?シャーロックも、ダリアが現場での調査を後押しする。

??憧れの二人からの推薦に嫌と言えないダリアだった。

二十四話 狩猟祭 1

?? マイククロフトがどういうコネと、どういう権力を使ったのかダリアはにわか仕立てのケンブリッジ大学生になっていた。

?? 大学生を名乗るには違和感を感じない年齢であったし、ケンブリッジの授業にはそこそこついていける学力を有していた。

?? しかし、マイククロフトが選んだ学科は神学科で現実主義のマイクロフトが選んだのかと思うと、なんだかダリアにはおかしかった。?? 神学科には縁のない生活をしていたので、ダリアはどんな勉強をするのか検討がつかなかった。

?? 狩猟祭に着る予定の乗馬服と、その後のお茶会のドレスも仕上がって来た。

?? 乗馬服の上着の内側には、小型のピストルがしまえる様になっていたし、脇のポケットには、魔術用の小道具をしまえる様になっていた。

?? ドレスにらついても同様で、定番のガーターベルトにピストルがしまえる様になっているのに、ダリアは苦笑した。あとから、ロベルトがどうしてもそれにして欲しいと注文を追加していたと知って呆れた。

?? 狩猟祭前日になっても、アニメ・ムンディの動向は掴めなくデイオゲネス・クラブとしては最大限の警戒をするしかなかった。

?? 乗馬服を来て、王族御用達の狩り場にダリアはやってきた。?? 深い緑のジャケットには、エンブレムが胸元についていて、ウエストラインで絞られた女性の体を美しく見せる下でになっている。細身で護身用にと鍛えられた身体は、雌鹿のように伸びやかで来賓の貴族たちの目を引いた。

?? 皇太子アルゼルも、どう言うわけがダリアと同じ深い緑のジャケットを着用していた。二人並ぶとお揃いのように見える。

?? 狩猟には参加しないがアルゼルの顔をひと目見て、アピール

しようとして着飾ってきた貴族の娘たちは、あからさまな嫌悪をダリアに向ける。

「それでもなにも言っていないのは、ダリアが名門の出であること、狩猟祭に参加する妃になるには、勇ましすぎるとはんだしたからだ。」

「確かに、今だ貴族の娘は慎ましやかに大人しくあるべしという考えが主流なので、男達に混じり馬に乗り草原を駆けるのは、はしたないとされている。」

「ダリアは、ロンドンに来るまでは乗馬はもちろん、アーチェリーやフェンシングなど貴族の娘たちがやらないような習い事をしていた。おかげで、アルゼルに狩猟祭に参加するように言われたのだから、何が好機となるか分からない。」

「その服、とても似合っているよ。私達、お揃いのようなだね。」

「アルゼルがニコニコと、非常に機嫌良さそうにダリアに近づいた。」

「お揃いのようなだね、ではありません。殿下、謀りましたね？」

「どうも、注文にだした服の事をしつこく尋ねてくると思ったのだ。あまりに何度も尋ねるので、ダリアは隠しているのも馬鹿らしくなりあっさりと答えてしまった。」

「注文内容を聞き出して、さり気なくお揃いになるようにアルゼルはオーダーしたに違いない。」

「ふふ、あそこに居るご令嬢なんか、目線で君を殺しそうだよ。」

「ダリアの耳元に口を寄せてアルゼルが囁いた。どうみてもこの状況はアルゼルとダリアが仲睦まじくイチャイチャしているようにしか見えない。」

「ダリアもそんな気がしているものの、アルゼルの言われるがままに目線で自分を、殺しそうな貴族の令嬢を見た。」

「世界でも滅亡したのかと言う程の不機嫌な表情で、ダリアを睨みつけている。」

「貴族の令嬢は、感情をあからさまに顔に出さない教育を受け

ているはずだが、取り繕う余裕すらないようだ。

「あれは、ウィリアム公爵のご令嬢です。殿下の花嫁候補のひとりですよ？」

「???流石にダリアは、ディオゲネス・クラブに出入りするようになった、所謂名もの人びとの顔と名前が一致するようになった。」

「私の得になりそうにないからね、名前も知らないな」

「???アルゼルがつまらなそうに答えた。 ???ウィリアム家は、確かにディオゲネス・クラブには出入りしていない普通の貴族であった。」

「そろそろ行こうか」

「???アルゼルは、自分の馬に乗りダリアにも馬に乗るように促す。」

「???ダリアは、溜息をついて愛馬に跨った。」

第二十五話 狩猟祭2

馬上の人となったダリアは、アルゼルに続いて馬首を巡らす。

? アルゼルは、ダリアがついて来るのを当然だと思っている様で、狩猟犬の声の鳴くほうへ走らせる速度を上げた。

? ダリアは負けじとアルゼルの馬の後ろに付けて駆け抜ける。草と土の匂いが風に乗っているのが心地良い。

林の中に入る前に、馬の足を止める。

? どうやら、一斉に野に放たれた狩猟犬の一匹が林の中で獲物を追い込んだ様だ。

? アルゼルは犬笛を吹いて、林から獲物を追い出す様に犬に指示をだした。

? すぐに、狩猟犬が鹿を林の外へと追い立てるのが視界に入った。

? 林から鹿がでて来たところをアルゼルがすかさず銃で狙うが、うまく照準が合わなかったのかそのまま、野に駆けるのを見逃した。

? 追いかけるように、馬をすぐに走らせ馬上のままアルゼルは鹿に銃を放つ。

? 短く悲鳴を高く上げて、鹿が地面に倒れ伏す。角が無いので、牝鹿のようだ。

? ダリアもすぐに、追いつき馬から降りて鹿が仕留められた事を確認した。林から追い立てた狩猟犬に、褒美の生肉をダリアは与えた。

「流石に堂に入ってますね」

? 余りの手際の良さと、腕の確かさにダリアは感嘆の声を上げた。

「私の貴重な趣味のひとつだからね」

? ? ダリアに褒められてまんざらでもないなか、アルゼルは嬉しそうに微笑んだ。

? 他の参加者たちも追いついたようで、口々にアルゼルを讃える。

アルゼルはそれを軽く受け流して、再び犬笛を吹いて狩りを再開させた。

「気がついてるかい？」

「?? 一時間ほど、狩りをしただろうか。追いついて来る参加者たちの数が徐々に減った頃、アルゼルは真横につけているダリアに問いかけた。

「チャンスを伺っていたのでしょね。狩猟祭はどうしてもガードが薄くなりますから」

「王家の所有地である平原を縦横無尽に駆け巡るのだ。いくら人を増やしても、常のような警備は望めない。

「セキュリティを抜けるとは、腕は良さそうだ」

「?? ダリアたちの警護の他に、ちゃんとシークレットサービスが護衛していたはずなのだ。

「?? それにすら気づかせないで、アルゼルたちに肉薄できるのは限られている。

「?? アニマ・ムンディの幹部が来たのだろう。」

「?? うまい具合に林の中で、アルゼルとダリアの二人だけしかない。

「殿下が、野暮なことをするなおっしやるから、皆さん遠慮して離れてしまっただですよ」

「?? 年頃の女性を狩りに連れてきて、「野暮な事をするな」などといえは、誰だつて気を利かす。

「?? ましてやアルゼルに取り入りたい貴族たちなら尚更だ。

「邪魔が居ないほうがいろいろやり易い」

「?? ? アルゼルの言葉に、ダリアではない声の笑い声が出た。

「話分かるね、殿下」

「?? 霧が発生するかのように、ジワリと姿を表したのはいつかの夜にも、ダリアたちの前に現れたレラだった。

第二十六話 狩猟祭3

「また、貴方なんですか」

ダリアは、呆れたように言いながら馬首をレラに向ける。

「僕が一番君たちに興味があるからかな」

レラは、和やかに笑いながらゆびを鳴らした。それが合図になってダリアたちを取り囲むようにゾンビが地面から滲み出る様に現れる。「この間のように狭い場所じゃないから、用心のために囲ませて貰ったよ」

今は、戦う気はないということだろうか。ダリアは、すぐに攻勢に出られる様に馬上で身を低くする。

「アルゼル殿下、考えなおしませんか？」

？レラが言葉だけは恭しくアルゼルの問いかけた。

？ゾンビたちが今にも間合いを詰めそうな雰囲気だが、アルゼルは平然としている。

「何度聞かれようと、我が国はアニマ・ムンディには屈さぬ」

「新世界の玉座が貴方のものでも？」

「アニマ・ムンディが裏で手を引いている世界など要らぬ」

？威厳のある次期国王の声だ。ダリアは、普段は優しいアルゼルの意外な一面に本当の姿を垣間見た気がした。

？アニマ・ムンディは、「世界を壊し新しい世界を創造する」ということを掲げた国際秘密組織だ。アニマ・ムンディが造った新しい世界の王に、アルゼルを据えようとしているようだ。

？もう少し、御しやすい人を選べば良いのに、とダリアは不謹慎にも思った。アルゼルは、次期国王として優秀でとても、操り人形にすることはできない。

「殿下は、我々の考えを理解してくださると思っていましたか」

「この世界は変わる必要がある、だが変えるのはお前たちではないということだ」

「仕方ないですね」

「全然、仕方ないようには聴こえない明るい声でレラは肩を竦めてみせた。」

「アルゼル殿下は、今後目障りになりそうなので、始末させていただきます」

「ゾンビたちは、レラの命令に従いダリアたちに襲いかかる。間合いを詰める前に、ダリアは馬の手綱を引きゾンビの囲いを飛び越える。同じようにアルゼルも囲みから抜け出した。」

「確かにゾンビは倒れないので厄介だが動きが遅いので、避けるのは簡単だった。」

「ダリアは、右往左往しているゾンビに向かってポケットから取り出したサシエを投げつけた。」

「ゾンビたちの群れの真ん中に落ち、強力な睡眠作用のある匂いが立ち込める。」

「ダリアは、風上に逃げたので影響をうけない。続けて鞆から割れやすい陶器製の瓶をゾンビに投げつけた。」

「まるで人に塩酸を投げつけたかの様に、瓶が当たったゾンビの肌が溶け始める。」

「こんな時のために貰ってきておいたの」

「ダリアは、対ゾンビ用としてイギリス国教会から儀式用の聖水を貰ってきたのだ。もう一本を鞆からとりだし、自分とアルゼルの結界用として地面に撒いた。」

「随分用意がいいね」

「殿下もこうなる事を予想しておいでなのでしょう？」

「アルゼルは、ダリアの言葉に苦笑を浮かべて拳銃を構えた。一見普通の拳銃だが、中には教会から祝福された銀の弾丸が込められている。」

「また、狙ってくるだろうと用意しておいた特注品だ。」

「せっかくの狩猟祭だからね、獲物を沢山狩っておきたいだろう？」

「口の端を上げて嗤うアルゼルは、いつもの人の良い王子様の貌

ではない。まるで悪役と言っても良いぐらいの人の悪い笑みを浮かべていた。それすらも様になる顔立ちだ。
?? 眠り香が効かなかったゾンビたちは、仲間を踏み越えてダリアたちに詰め寄ろうとする。アルゼルは、馬上から射撃訓練のように次々とゾンビを撃ち落としていった。

第二十七話 対峙

これだけ拳銃を打ち鳴らしているのに、アルゼルの取り巻きたちは誰一人やってこようとほしない。

ダリアは、誰か人が来る事によつて有耶無耶にしてアルゼルを連れて逃げようと考えていたのだ。だが、敵もそのくらいは予想していたようだ。レラは、特殊な結果を張りめぐらせ普通の人が近づきたいと思わないようにしているようだ。

ダリアは、ゾンビに囲まれた時からロベルトに緊急信号を送信しているがロベルトは応答しない。わざわざ、ピラス型の発信機をつけているのに、応答しないのでは役立たずである。

「電波を使って呼びかけてるなら無駄だよ。僕がそんな抜けたことをすると思う？」

レラは、この襲撃を周到に用意していたようだ。ダリアの身につけている発信機はピラスの型をした携帯電話のようなもので、電波が飛ばなければ使えない。レラに通信手段を塞がれ、ダリアは柄にも無く舌打ちをした。

ダリアは、ロベルトが近くにいてくれることに賭けてピラス型の発信機での通信を諦めた。

アルゼルも、護身用の拳銃で応戦を始めた。ダリアと同じく銀の弾丸が込められている。

ゾンビたちに囲い込まれない様に撃ち減らしているが、多勢に無勢、徐々にダリアたちは包囲されようとしていた。

「彼らは、人を喰うよ。頭も身体も」
どこか楽しそうにレラは言った。

人を襲うばかりか、食べるとは。ダリアは身の毛がよだつ思いがした。吸血鬼は、人の血を吸いゾンビは人の肉を喰らう。どちらも元は人間だ。

「そう簡単に食べられないわよ」

挫けそうになる心を奮い立たせるため、ダリアは強気に言い返した。虚ろな目でゾンビたちがダリアを見返す。虚ろな目の奥が獰猛に光ったような気がした。

「殿下、どうにかして包囲網を抜けます。馬で駆け抜けましょう」
「包囲網を抜けるのはいいけど、ここはレラのテリトリーの中だからね。同じように囲まれるだけだよ」

「アルゼルのいう事は最もだったので、ダリアは返事に困った。戦いは習ったが、経験値不足で適切な対処ができないでいる。

「以前みたいに、楽に結界を破らせてくれるといいけど」

「アルゼルは、言いながら馬の足元に魔方陣を出現させる。下草の生えた地面に乳白色に輝く模様が描かれた。

「アルゼルが、口の中で短かく呪文を唱えると、魔方陣が白く輝き光の柱が空に上がる。

「これで壊れないなんて、丈夫に造ったものだね」

「アルゼルはやれやれ、と言いたそうにレラを見据えた。ダリアは、今の状況にぼかんと、間抜けに口を開けたままだ。

「アルゼルは、護衛対象だったのでいくら魔法が使えるとって、もほんの少しだと思っていたのだ。

「こんなに物語の主人公みたいに力があるのなら半端な護衛はいらないはずである。通りで、ロベルトを連れまわすわけだ。ロベルトのような人外の企画を持った者ではないと護衛なんか務まらない。ダリアは、間抜けに開いていた口を閉じて対峙しあっている二人を見つめた。レラの意識は、アルゼルに向いている。

「この隙について、結界を破らない事にはギリ貧になる。

「一か八か、ダリアは起死回生の賭けに出る事にした。

「懐には、緊急用として人口血液のパックが入っている。吸血鬼に襲われた時の囷用に持ち歩いているのだ。

「ロベルトのアドバイス通り、自分の血も少しだけ混ぜてあるの。普通の人口血液よりも美味しそう匂いがするらしい。

「このパックをあけて、素晴らしい嗅覚の持ち主であるロベルト

を呼び寄せられないだろうか。

?? 外側からから、結界を破れるかもしれない。

?? また、少しづつ包囲を狭めてくるゾンビたちにダリアは銀の弾丸で威嚇してレラ目掛けて血液パックを投げつけた。

?? レラは、当然のようにそれを払いのけて目には見えない細い糸でパックを空中で切り裂いた。

?? パックから血液がこぼれ落ち、レラの身体に降り注ぐ。

「なんのつもり？」

?? レラは、嘲笑をダリアに向ける。ダリアは、意図通りの結果に安心しレラの挑発を受け流す。ダリアの反応に訝しんだレラはやがて何かに気がついたように舌打ちをした。

?? 直後、空気が軋む音が響いた。

第二十八話 反撃

なんとも形容し難い音が、辺りに響いた。空気が破裂する音だろうか。次に、淀んでいた空気が動き風が吹き抜けた。

ダリアが、風上へ視線を向けると見えない壁に手をかけるように立っているロベルトがいた。

「俺だけ仲間ハズレは無いだろう?」

凶悪な笑みを浮かべて、ロベルトは見えない何かを越えてダリアに背を向けて立った。

?ダリアは、ロベルトの名を呼んだ。ロベルトは、顔だけ振り返りいつもの自信に溢れた得意げな笑みを見せた。ダリアは、その笑みに釣られたように笑った。まだ、強張った笑顔ではあったけれど。

?ロベルトは、人を超える跳躍力でゾンビたちの集団の中に飛び込み素手で殴り倒し始めた。特殊な手でもしているのか、殴られたゾンビ達は地面に倒れるとまるで、溶けていくように形を失っていく。

「ロベルトばかりに良い格好はさせられないな」

?アルゼルは、ダリアの隣に並んで恭しく右手を取った。

「お手伝い頂こうか、レディ」

??アルゼルは、始めてレラに襲撃を受けた時と同じようにダリアに優しく微笑みかけた。ダリアは、すつと気分が落ち着いていくのが分かった。

「さつきは結界を破れなかったけれど、今度はロベルトが破って来たからね。完全に壊してしまおう」

??アルゼルは教師の様にダリアに言うと、懐から国教会から貰い受けた聖水の入った小さな瓶を出した。

「魔方陣の半分は君に任せる。いいね」

??ダリアは頷き、同じように聖水の入った瓶を取り出して呪文を唱えながら魔方陣を描き始めた。

??魔方陣を一筆描いたとたん、発光しはじめる。アルゼルも魔

方陣を描き始めたので呼応しているのだ。

?? 時折、ゾンビが襲いかかってこようとするが、ロベルトが仕留めるか魔方阵の威力の前に叶わなかった。

?? 魔方阵が、完成してアルゼルはダリアの手を再び恭しくとり、今度は向かい合うようにダリアの体の向きを変えた。

?? 向かいあい、手をつないで対になる呪文をダリアとアルゼルは唱え始めた。

?? その様子をゾンビを殴り飛ばしながら、微妙な表情を浮かべたロベルトが見つめる。

「アハハツ やっぱり、君がそうだったのかっ」

?? 高みの見物をしていたレラは、ダリアを見て高笑いをした。

「あの方が、殿下の添え星が現れたなんて仰るからずっと捜していたんだ」

?? レラは、ゾンビたちに総攻撃を命じて、ロベルトの動きを封じると一気にその横を駆け抜ける。

?? ロベリアが阻止しようと、風より早く手を伸ばすが、レラの方が早い。

?? アルゼルを見つめながら一心不乱に呪文を唱えるダリアのあと、五十センチという所でレラは立ち止まる。

?? 魔方阵が邪魔してそれ以上、ダリアに近づけないのだ。

?? ダリアを庇う様にアルゼルが、自分の方へと引き寄せるが、呪文詠唱は辞めない。ダリアが呪文詠唱したまま、レラへと振り返った。

「まず、君だ。殿下の添え星さえ居なくなれば、殿下の力は半減する。あの方の望む世界に、また近くなるんだ！」

?? 楽しそうに笑いながら、レラはダリアに首切り仕草をした。

?? ダリアはムツとしたように眉を寄せた。

?? 直ぐに、呪文詠唱が終わり世界にひびが入った。

?? ガラスの割れるような音がして、世界の破片が空から降り注ぐ。結界が破れたのだ。

「今日は逃がさないぜ」

?? ロベルトがゾンビの群れから跳躍し、レラ目掛けて翔る。

「残念、また、今度相手してあげるよ」

?? あと少しで手が届くと思われる距離までロベルトが近づくと、レラは高笑いをしながら消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0775f/>

ロンドン・ノクターン

2011年4月3日07時09分発行